

文化庁 日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業
事業区分 日本語教師の養成カリキュラム開発
民間における日本語教師養成研修（420 単位時間以上）

事業名称：

インターカルト日本語教員養成研究所

「日本語教師養成講座 420 時間 通学＋オンラインコース」

カリキュラム開発事業

事業報告書

株式会社インターカルト日本語学校

実施期間：平成 30 年 7 月 19 日～平成 31 年 3 月 20 日

令和元年 5 月 24 日～令和 2 年 3 月 19 日

目 次

1. はじめに	1
2. 事業の目的	2
3. 事業概要	3
3-1. 日本語教師養成講座（420 単位時間以上）に係る教育課程の検討	3
3-2. 日本語教師養成講座における教材開発と検討	3
3-3. 対面授業とオンライン授業による養成講座の実施	3
3-4. 事業全体の評価	3
4. 教育課程の検討	5
4-1. 実施計画	5
4-2. 実施の検討の過程	5
4-3. 理論講座の教育課程	7
4-4. 実践講座の教育課程	8
4-5. 養成講座全体について	12
4-6. オンライン・システム構築の経過	13
5. 教材の検討・開発	14
5-1. 教材開発実施計画の概要	14
5-2. 実際の検討過程	14
5-3. 初級教材の作成	16
5-4. 中上級教材の作成	21
6. 養成・研修の実施	25
6-1. 養成・研修の目標	25
6-2. 養成・研修内容の概要	25
6-3. 科目ごとの実施状況	26
6-4. 評価について	47
6-5. その他の活動の実施状況	47
6-6. 実施にあたってのオンラインの状況	48
7. 事業全体の評価	50
7-1. 検討方法	50
7-2. 検討結果	50
7-3. 修了生アンケートのまとめ	52
8. 成果と課題	60

1. はじめに

インターカルト日本語教員養成研究所では、1978 年より日本語教師養成事業を開始し、42 年目を迎える。当初より日本語指導に関する確固たる思想を持ちその考え方に基づいた養成研修を行ってきた。それを踏襲しつつ、「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版」で示された内容にも適合する内容にし、これからの時代が求める日本語教師養成講座を確立してゆく必要性を感じ、今回の取り組みを実施した。

本報告書はインターカルト日本語学校日本語教員養成研究所が受託した文化庁委託事業としての日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業の日本語教師養成カリキュラム開発 民間における日本語教師養成研修（420 単位時間以上） の 2018～2019 年度の 2 箇年にわたる事業の結果の報告である。

実施期間：平成 30 年 7 月 19 日～平成 31 年 3 月 20 日

令和元年 5 月 24 日 ～令和 2 年 3 月 19 日

2. 事業の目的

本事業は、国内外で増加かつ多様化する日本語を必要とする者に対する日本語指導を行うための基礎となる知識・技能・態度を身につけ、それぞれの教育現場で定められた日本語教育プログラムに基づいた日本語教育を行うことのできる人材を養成するプログラムの開発を行い、さまざまな活動分野での日本語教育を志す者に提供することを目的とする。

まず、「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版」に示された「日本語教師【養成】における教育内容」の中で、必ず実施すべきと示されている「必須の教育内容」を満たす養成講座であることが基本となる。

知識に偏重することなく実践力を身につけた日本語教師を養成するために十分な実習を盛り込んだプログラムを開発し、提供する。

また、地域性を含めた生活環境の条件等から日本語教師養成講座に通学するのが困難な人は確実に存在している。そのようなニーズを満たすために、対面授業とオンライン双方向コミュニケーションツール「ZOOM」を活用したオンライン授業を併用することで、課程の全時間を通学することが困難な者にも受講の機会を提供できるようにすることも、本事業の目的の一つである。

3. 事業概要

3-1. 日本語教師養成講座（420 単位時間以上）に係る教育課程の検討

2 年計画の 1 年目である 2018 年度は、旧カリキュラムに基づく当機関の日本語教師養成 420 時間コースの現行カリキュラムを、「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）」の「日本語教師【養成】における教育内容」及び「日本語教育に関する 420 単位時間以上の養成コース」に示された必須の教育内容 50 項目・単位時間数と対照し、全てを満たしているかを検証する。欠けている、あるいは不十分な教育内容についてはこれを補う作業を行ってきた。2 年目となる 2019 年度は主に新カリキュラムに基づく講座の実施と評価、改善を行う。具体的には、4 月開講コースで新カリキュラムを実施し、修正・改善点を確認する。それを踏まえ、10 月開講コースを実施する。

日本語教育の多様な活動分野で求められる知識や技能について、有識者の助言を得ながら教育課程検討委員会において検討し、必須の教育内容を具体的な科目に編成し直し、重要度に応じた比重の置き方を決める。2018 年度に行ってきた検討をさらに進め、より適切な講座となるように努める。また、教育課程検討委員会においては、2018 年 10 月期の反省点を踏まえ、各科目に適した授業形態（対面授業か ZOOM を利用したオンライン授業か、また講義形式か演習形式かワークショップ形式かなど）の選択も行い、より良い形態に改善していく。

3-2. 日本語教師養成講座における教材開発と検討

教材開発・検討委員会を組織し、2018 年度には養成講座実施者である当機関と各科目担当講師の意図に合致した教材を選定する作業を行ってきた。2019 年度は、各科目の担当講師が必要に応じて補助教材を作成し、委員会において検討する。

当機関の特色でもある教育実習については、実習担当講師を含む教材開発・検討委員会において、実習内容、形態、回数等の詳細を検討する。また、必要に応じて授業サンプルとなる DVD 等の視聴覚教材を作成する。2018 年度の初級教材作成に続き、2019 年度は必要に応じて初級教材の補充を行い、また中級・上級教材についての検討を行った上で必要なものを作成する。

3-3. 対面授業とオンライン授業による養成講座の実施

実習関係科目は対面形式による授業を行い、それ以外の科目については、対面授業と並行して ZOOM を利用し授業を配信する。オンライン授業については録画機能を利用することにより、授業の復習および欠席時の補講を可能にするなど、受講者の便宜を図るようにする。

3-4. 事業全体の評価

(1) 養成講座受講者による評価

①受講者アンケート：養成講座受講後にアンケートを実施し、講座内容、教材、講師、また講座全体の満足度についての評価を行う。

(2) 機関による評価

①講座内容に関する自己評価：当機関内で、講座内容、教材、実施形態等についての評価を行う。

②受講者の受講状況に関する評価：受講者の講義、実習、課題等への取り組みや成果を通じて、講座の評価を行う。

③受講者の就業状況に関する評価：養成講座修了後の就業状況から、講座の評価を行う。

(3) 評価・検討委員会による評価

上記 (1) (2) を踏まえて評価・検討委員会を実施し講座全体の評価を行い、評価内容及び改善点を整理した上で次期講座実施案を策定する。

4. 教育課程の検討

4-1. 実施計画

教育課程検討委員会を組織し、以下のような方法で検討することを計画した。

(1) 平成 12 年「日本語教育のための教員養成」に基づく旧カリキュラムに則った当機関の日本語教師養成 420 時間コースの既存カリキュラムを、「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版」の「日本語教師【養成】における教育内容」（p.43）及び「日本語教育に関する 420 単位時間以上の養成コース」（教育課程編成の目安：表 4）（p.72 - 73）に示された必須の教育内容・単位時間数と対照し、欠けている、あるいは不十分と思われる教育内容については、これを補う。

また、必須の教育内容以外も含め、当機関の養成講座の特色が出せる教育内容を検討する。

(2) 多様な活動分野のそれぞれにおける日本語教育現場で求められている知識や技能がどのようなものであるかを、有識者の助言を得ながら教育課程検討委員会において検討し、必須の教育内容を具体的な科目に編成し直し、重要度に応じた比重の置き方を決める。

また、各科目の特性に合致する授業形態（対面授業か Zoom を利用したオンライン授業か、また、講義形式か演習形式かワークショップ形式かなど）を決定する。

(3) 「コミュニケーションを通じてコミュニケーションを学ぶ」という日本語教育の特性を理解した日本語指導者を養成するため、当機関が 1978 年以来 40 年以上に渡り培ってきたコミュニケーション重視の教育観を反映させた実習プログラムをいかなる形で実施するかを検討する。

4-2. 実際の検討の過程

カリキュラムの検討の前に、当機関（インターカルト日本語教員養成研究所）ではどのような日本語教師養成講座の実施を目指すのかを明確にしておきたい。

「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版」の p.24 に示されている「日本語教師【養成】に求められる資質・能力」を備えた教師を養成すること、ということになるのであろうが、もう少しかみ砕いた言葉で言うなら、「実践力を備えた教師」と言うことになるのではないかと考える。では何をもって実践力とするか、ということになるが、「自立的に授業を計画し、授業ができる力」を有する教師を育てるということだと思う。

そのために、どのような能力が必要かということをもさらに具体的に考えると、

- ① 日本語・日本文化に関する深い知識を持っていること
- ② 知識だけでなく、自分で考えて授業を行うことができること

が必要なのではないかと思う。

もう一度まとめてみると、「知識に偏重しない実践力を持った教師」、言い換えれば、自立

して授業を創造することのできる教師。指導すべき項目をどのように分析し、それを伝えるためにどのような方法で指導するのか、どのような授業を行うのかを自立的に行うことのできる教師を養成すること、ということになろう。これは、文化庁の報告書とも合致するといつてよい。

ではどのような養成講座であれば、それが可能となるのだろうか。まず、日本語教師の基礎となる知識を十分に提供することと、十分な教育実習が不可欠である。しかし、実習に関しては時間数の多寡だけでなく、在り方そのものが問われるのではないかと思う。

しかし、受講希望者のニーズの中には、日本語教育能力検定試験の合格というのが常に存在する。やはり、「知識」の部分に期待している人は多く、それが重要であることは否定のしようもないので、まずは、報告書の示す内容を満たすことを大前提とすることにした。これが満たされれば、検定試験の範囲を網羅的に扱うことになるからである。しかし、当機関の養成講座の特徴としては、試験の点数を取るための知識ではなく、専門分野への知的好奇心を刺激するような知識を提供する授業を行う、ということを目指したいと常々思っている。

そこで、まず 2018 年度の課題として、2017 年度までの旧カリキュラムが必要項目を満たしているかどうかの点検から始めた。

その結果、「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版」の「日本語教師【養成】における教育内容」（p.43）の「必須の教育内容」及び「日本語教育に関する 420 単位時間以上の養成コース」（教育課程編成の目安：表 4）（p.72 - 73）に照らし、以下の項目が欠けているまたは不十分であることを確認した。

内容について確認していくと、これらの項目のうちほとんどのものは扱っていなかったのではなく、どの科目の中で取り上げるかが明確にされていなかったということがわかった。そこで、それぞれの項目をどの科目の中で扱うかを明確にするようにした。

〈2017 年度までの旧カリキュラムの中で不十分な項目〉

- (6) 日本語の試験 ⇒ 「評価法」
- (14) 談話理解 ⇒ 「言語理解と習得」
- (22) 教室・言語環境の設定 ⇒ 「言語教育の基本」
- (30) 授業分析・自己点検能力 ⇒ 「評価法」
- (32) 異文化間教育 ⇒ 「異文化理解・コミュニケーション」
- (36) 著作権 ⇒ 「著作権と教科書・教材」
- (46) 受容・理解能力 ⇒ 「言語理解と習得」
- (49) 対人関係能力 ⇒ 「社会言語学」
- (50) 異文化調整能力 ⇒ 「異文化理解・コミュニケーション」

2018 年～2019 年度の 2 箇年をかけて、「日本語教育人材の養成・研修の在り方について

（報告）改定版」の「日本語教師【養成】における教育内容」（p.43）に示された必須の教育内容・単位時間数に準拠したカリキュラムに改定した。具体的には、不足している項目を、どの科目で取り上げるか、当該科目の内容（シラバス）をどのように変更する必要があるかを、教育課程検討委員会で検討し、その案の内容を授業に組み込むことを担当講師に依頼した。

2018 年度 4 月期に教育課程の検討を進め、同年 10 月期より改定したカリキュラムに基づく講座を実施、講義後に担当講師からの聞き取り、打ち合わせをしながら調整・改編を行うことで、2019 年度 4 月期、10 月期には必要項目を満たしたよりバランスの取れたカリキュラムになったのではないかと考えている。

当機関の日本語教師養成講座は、大きく【理論講座】と【実践講座】に分かれている。理論分野の科目、いわゆる座学の中の授業の実施を支える理論について学び、知識を獲得する科目を【理論講座】と呼ぶことにする。これは「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版」の「日本語教師【養成】における教育内容」の 3 分野・5 区分の中の「社会・文化・地域」「言語と社会」「言語と心理」「言語と教育」の一部、「言語」の一部で構成されている。また、【実践講座】は、教育実習および座学の中でも日本語指導の実践に直接つながる「言語と教育」の一部、「言語」の一部とする。

以下、理論講座、実践講座それぞれの教育課程検討の内容について記述し、その後、オンライン・システムに関して説明することにする。

4-3. 理論講座の教育課程

当機関の日本語教師養成講座の特徴の一つは講師陣にあると考えている。理論講座では非常に広範囲にわたる専門科目の内容を少数の講師で網羅することは困難であると考え、各科目を専門とする講師に依頼する方針を取っている。各分野の第一線で活躍している著名な研究者や気鋭の研究者、日本語教育の現場での豊富な経験を持つ講師が各科目を担当している。

また、研究者による単なる専門知識の注入とならないように、日本語教育の現場で外国人学習者への教授経験を持つ教師を中心に講師依頼をすることで、教育現場の状況を踏まえた専門科目の授業が実現できていると考える。

各科目の内容を専門とする講師に講義を依頼することで、カリキュラム改編にあたって当機関からの提案、依頼が妥当なものであるかについて適切な助言を受けることが可能となっている。

よって、教育課程の検討に関しては以下の過程を経て、決定することとした。

- (1) 教育課程検討委員会による必須項目を満たしているかの点検
- (2) 同委員会による不足項目の割り振り、または新規科目の設置

- (3) 新たに割り振った項目を含めた新規カリキュラムの内容を各科目の担当講師と相談
- (4) 担当講師からのフィードバック
- (5) カリキュラムの修正

実際の検討は、(3) の段階までで特に問題が生じることはなく、修正の必要性がありそうなことは相談をする段階で講師側からの提案を受けることが多かった。

なお、理論講座の各科目の評価は、「テスト」「レポート」「課題」のいずれかによって行う。評価基準は以下の通り。

A=学習目標に十分に到達している

B=学習目標に到達している

C=学習目標に到達するのに不足している点がある

F=学習目標に到達していない

※F 評価の場合は、再テスト、レポート・課題の再提出により再度評価する。

4-4. 実践講座の教育課程

「実践講座」の中でも特に「日本語教育の実践Ⅰ・Ⅱ」「教育実習Ⅰ・Ⅱ」には重点を置いている。実践力のある日本語教師を養成するためには「教育実習」の充実が不可欠であると考えられる。

以下、当機関の「教育実習Ⅰ・Ⅱ」とそれと連動する「日本語教育の実践Ⅰ・Ⅱ」の内容について記述する。

(1) 「教育実習Ⅰ（初級）」について

「教育実習Ⅰ（初級）」は、「日本語教育の実践Ⅰ（初級指導）」と連動しており、「日本語指導の実践Ⅰ」で分析し、指導方法を検討した学習項目（「みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ」に準拠）について「教育実習Ⅰ」で模擬授業を行う。取り上げるのは基本となる 30 項目である。

項目数がなぜ「30」か

初級レベルの日本語で取り上げられる文型・表現は「30」を大きく超えている。「みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ」を例に挙げても 50 課構成になっており、各課で扱う文型・表現が複数あることを考えても容易に想像できる。指導項目のすべての指導方法を身に付けるというのも一つの方法であると思う。しかし、養成講座の限られた時間の中でこれらのすべてを取り上げ、その指導法を扱うのは困難であり、効果的ではないと考えた。

教科書が異なっても初級教科書で扱われる文型・表現はほぼ一致しているとはいうものの、全く同一とは言えず、仮に「みんなの日本語」の文型・表現をすべて扱ったとしても教科書が変われば、授業で取り上げなかった指導項目に遭遇することになる。ましてや、中級以降になると取り上げるべき項目が爆発的に増大し、使用する教科書によって出現する順

序も内容も異なってくることを考えると、養成講座で行うべき指導は、各項目の教え方マニュアルを示すことではなく、項目の持つ意味内容をどのように分析し、いかにして学習者に理解させるかを自ら考える力を養うことではないかと考えた。

本事業の初めの段階では、項目数を「50」にする計画であったが、限られた時間数の中では消化不良になりがちで、各項目についてじっくり考え、自分の力で分析できる段階に達しないであろうという結論に達し、項目数を「30」に絞ることにした。あくまでも 30 項目の指導法マニュアルを提示するのではなく、各項目について受講生の一人一人が考え、自ら分析し、どのように指導するのが効果的かを考えることを目標としている。この 30 項目を分析する過程で、自立的に指導項目を分析し、指導方法を考え、教案を作成する力を養うことで、初めて出会う項目に対しても自力で対処できる力を獲得させることを目的としている。

なぜ「みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ」を使用するか

「みんなの日本語」を使用する理由の一つは、日本国内および海外の日本語教育機関で広く使用されている教科書である、つまり本養成講座修了後に就職した先で使用することになる可能性の最も高い教科書であるということである。

また、周辺教材が充実していることも採用の理由の一つである。特に文法解説の各国語版は、項目分析に当たって大いに活用している。語彙索引を活用することで、導入項目の前にどのような語が既習であるかを容易に確認することができる。授業の中で教師が使って問題がないのは既習語であるが、強く意識を働かせていないと、特に初級の授業では未習の言葉を使ってしまいやすい。未習語を避け、ティーチャートークを実践するための教材として「みんなの日本語」は適しているといえる。もちろん使用教科書が変わることにより、当該項目を導入する際の既習語は変わってしまうわけだが、未習・既習の意識を持つうえでの利点は大きい。

加えて、当機関併設の日本語学校の初級クラスで使用している教科書が「みんなの日本語」であるということも理由の一つとして挙げられる。対学生実習のモデル学生として協力を求めるにあたり、通常の授業と同一の内容であることは違和感なく受け入れられる可能性が高い。

ただし、各項目で扱う意味・用法は必ずしも「みんなの日本語」で扱うことになっている範囲とは一致してはいない。「みんなの日本語」では扱わない範囲のことを扱ったり、その逆もまたあり得る。

以下、「教育実習Ⅰ（初級）」および「日本語教育の実践Ⅰ（初級指導）」の教育内容について記述する。

「教育実習Ⅰ（初級）」における指導内容と模擬実習

・「日本語教育の実践Ⅰ（初級指導）」で分析した学習項目について模擬授業を行う（他の受講生を学習者に見立てて行う）

◆対学生実習前の模擬授業を行う中で、以下のような内容を取り上げる

- ・授業の構成・流れについて学ぶ。
- ・DVD で実際の授業を見ながら指導法について検討する。
- ・様々なドリルの目的の理解と実施のしかたを学ぶ。
- ・フラッシュカード・絵教材・AV 教材等の扱い方を学ぶ。
- ・効果的な板書のしかたを学ぶ
- ・教室におけるインターアクションについて学ぶ
- ・様々な教室活動に関する知識を得る。またその実施のしかたを学ぶ
- ・教案作成のしかたについて学ぶ
- ・授業で使用する教材、宿題等の作成のしかたを学ぶ（以上、クラス授業で行う）
- ・授業見学の時間は特に設定していないが、日本語学校の授業を録画した DVD ライブラリーを自由に閲覧する（個別学習＝時間外）

「教育実習 I（初級）」の流れについて

- ・受講者数が 12 名を超えた場合（定員は 24 名）、対学生実習は 2 クラスに分けて行う。
- ◆対学生実習（教育実習 I で「導入」のみの 10 分程度の実習 1 回、30 分の実習 2 回、計 3 回実施）
 - ・実習の目的と評価基準の確認（クラス授業内で）
 - ・各自割り当てられた課題（指導項目）について 30 分の授業を行うための教案を作成する。教案作成は基本的に個別学習で行う（時間外）。
 - ・他の受講生を前に練習（模擬実習）し、フィードバックを行う（クラス授業）。
 - ・教案を練り直した上で（個別学習）、実習担当講師による教案相談を受ける（個別学習）。
 - ・対学生実習を行う（クラス授業、1 人 30 分、他の受講生は見学及び評価用紙記入）
 - ・フィードバックを行う（クラス授業、実習担当講師及び他受講生から）

実習の実施形態について

- ・実施場所＝当校教室（通常の授業と同一教室）
- ・対象者とそのレベル・人数・属性など
 - ＝インターカルト日本語学校の在校生、指導項目に応じ、初級前半レベルのクラスの学習者および初級後半レベルのクラスの学習者
 - 人数は各回 6 名
 - 国籍（母語）、性別などクラス編成に厳密な基準はないが、漢字圏学習者・非漢字圏学習者、性別の異なる学習者が必ず含まれるように編成。

実習の評価方法

- ・評価基準を予め示した上で、実習を参観した担当講師が評価する

A=90 点～/B=80 点～/C=70 点～ の 3 段階で評価する。基準に満たない場合は、F =不可とする

（2）「教育実習Ⅱ（中上級）」について

当機関開設以来 40 年以上に渡り培ってきたコミュニケーション重視の教育観を教育実習に反映させるため、これまで実習プログラムの在り方について試行錯誤を重ねてきたが、基本的な方針として、初級指導のみならず中上級レベルにおける実習にも対学生実習を行うことを定番化し、またクラス授業だけでない個人指導の形態も取り入れた教育実習を確立していく方針を確認した。

中上級レベルの実習については、基本となる教科書は使用しない。教科書によって取り上げられている文型・表現、語彙などそれぞれ異なっており、特定の教科書に合わせた内容にする意味は初級レベルと比べて小さいと考えられる。それ以上に、複数の教科書を比較することで、中上級の教科書の構成を見ることに意義があると考えられる。

「教育実習Ⅱ（中上級）」は、「日本語教育の実践Ⅱ（中上級指導）」と連動しており、「日本語教育の実践Ⅱ」で扱った「語彙」「表現」「漢字」について各受講生に課題を提示し、教案を作成、教壇実習（模擬実習・対学生実習）を行う。

- ・「語彙」では、各受講生が課題として与えられた単語を使って教材を作成する（個別学習）。
- ・受講生は教材と同時に教案も作成する（個別学習）。
- ・各自が作成した教材を使用し、他の受講生を前に練習（模擬実習）を行う。その後フィードバックを受ける（クラス授業）。
- ・教案を練り直した上で（個別学習）、実習担当講師による実習相談を受ける（個別学習）。
- ・対学生実習を行う（クラス授業）。教壇実習は約 20 分、他の受講生は見学及び評価用紙記入。
- ・実習担当講師および他受講生からのフィードバックを行う（クラス授業）。
- ・「表現」でも、同様に各自与えられた項目について教案を作成（個別学習）し、模擬実習を行う。ただし、対学生実習は行わず、教案作成と模擬実習のみ行う（クラス授業）。
- ・「漢字」は、各自与えられた課題の漢字について、漢字圏学習者と非漢字圏学習者に指導する 2 つのパターンの教案を作成する（個別学習）。
- ・実習担当者は、漢字圏学習者、非漢字圏学習者それぞれに対する教案を作成（個別学習）し、10 分程度のプライベートレッスンを行う（クラス授業）。終了後にフィードバックを行う（クラス授業）。

実習の実施形態について

- ・実施場所＝すべての実習を当校教室で行う（通常の授業と同一教室）
- ・対象者とそのレベル・人数・属性など

= 「語彙」「漢字」ともにインターカルト日本語学校の在校生で、日本語学習 500～600 時間程度の学習者を対象とする

「語彙」は漢字圏学習者・非漢字圏学習者を含む 6 名でクラスを編成

「漢字」は日本語学習者に対し、1 対 1 の個人指導形式で実習を行う。クラスは編成せず、各受講生が学習者 2 名（漢字圏 1 名、非漢字圏 1 名）に対して実習するのに必要な人数を確保する。

なお、「読解」「聴解」「作文」「発話」等については教壇実習（模擬実習・对学生実習）行わず、「日本語教育の実践Ⅲ（技能別指導）」の中で、教材作成や教室活動についての指導を行う。

また、この他に教育実習の一環として「中上級クラス授業見学」（2 単位時間）を行う。見学の目的を明確にした上で見学に臨み、「中上級授業見学シート」に気づきを記入する。見学後、授業見学シートを提出する（クラス授業）。

実習の評価方法

・評価基準を予め示した上で、実習を参観した担当講師が評価する。複数の実習について各担当教師が協議し、評価を確定させる。

A=90 点～/B=80 点～/C=70 点～ の 3 段階で評価する。基準に満たない場合は、F=不可とする

4-5. 養成講座全体について

当機関では教育実習の実施において、併設する日本語学校の留学生に参加の協力を求めている。法務省告示校としての日本語学校を併設する機関として、留学生を意識した授業の在り方を提示することが当機関の特徴の一つであると考え。今後、多様な活動分野における日本語教育現場で求められる知識や技能についても学ぶことが必要になるであろうことは当然考えられるが、420 時間の養成・研修というのは、活動分野が枝分かれする前の、分野を特定せずに日本語教育の基本をしっかりと固める段階であろう。様々な分野に触れ、それらについて知ることは大切であるが、まずは下地となる意識・考え方を養うことこそが肝要で、当機関の場合その基礎固めを留学生対象に行っていくということなのだという結論に達した。

しかし、知ることの大切さは無視することはできない。そこで、「日本語教育概論」「日本語教育事情（世界と日本/地域）」等の科目の内容の充実と同時に、「やさしい日本語」に関する講義を加え、留学生に特化し過ぎない教育内容となるよう配慮することとした。

留学生以外に対する日本語教育のプログラムを充実させること以上に、教育実習そのものに力点を置くことを当機関の養成講座の大きな特徴の一つとしたいと考えることとした。「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版」p.73 の（備考 2）に「420

単位時間までの 126 単位時間分は、単位時間の幅を生かすことにより、各教育機関における特色ある教育課程を編成することが可能である」とされているが、当機関ではその多くの時間を「教育実習」につながる「日本語教育の実践」に充てることとした。

また、これまでカリキュラムに組み込んできた「落語に学ぶ日本語教育」「ボイストレーニング」から成る「パフォーマンス基礎講座」についても、他機関には見られない当機関の特色を出す内容として、継続して実施していくことを確認した。

4-6. オンライン・システム構築の経過

遠隔地であるなど地域性の問題やその他の事情によって通学による受講が不可能な人に向けた講座として、2018 年 10 月期にオンライン双方向コミュニケーションツール「ZOOM」を実験的に導入した。あくまでも、使用するシステムを決定する前段階の試験的な使用の段階で、外部への配信はせず、教室での一斉授業をサテライト教室に向けて配信するという形態が成立するか、ということを確認するという状態であった。その準備として、久留米サテライト、福島サテライトを設置した。

2019 年 4 月期に ZOOM を活用したオンライン講座のパイロット版として、久留米サテライトへの理論講座の配信を開始した。久留米サテライトには受講者はおらず、教職員が視聴する形での配信を行った。

サテライト教室との意見交換を重ねることにより、各科目の授業の形態に合わせた配信方法が明確になってきた。また、2019 年 10 月期には、福島サテライトに受講生を迎えての本配信を開始した。

また、ZOOM を使用した授業はサテライト教室への配信の役割だけでなく、その録画機能を生かして、東京教室に通学する受講生の復習や、欠席時の補講にも活用でき、受講生の利便性の向上につながった。

ただし、録画された動画のセキュリティが ZOOM だけの利用では確保されていないため、別のシステムとの組み合わせが必要になった。当機関では、NTT 東日本の「ひかりクラウド スマートスタディ」を使用することで、安全性が確保されると同時に、受講生の受講動画閲覧の利便性が高まった。

なお、サテライト教室への配信は基本的には理論講座（実践講座の一部）のみで、実践講座の「教育実習」にあたる部分はサテライト教室で独自に行うことを原則とした。オンラインでの実習には限界があり、対学生実習は現実的ではないというのが主な理由だが、修了後の就職先で求められる実践力にも地域性があるのではないかと考えることがあつたのである。

5. 教材の検討・開発

5-1. 教材開発実施計画の概要

「日本語教師養成講座 420 時間 通学+オンラインコース」教材開発・検討委員会の開催
教材開発・検討委員会を組織し、以下のように教材の検討、開発を進める。

- (1) 教材開発・検討委員会において市販教材の分析・検討を行い、養成講座実施者である当機関と各科目担当講師の意図に合致する教材を選定する。
- (2) 各科目担当講師が必要に応じて補助教材を作成し、教材開発・検討委員会において検討する。
- (3) Zoom を利用したオンライン授業で使用する教材の内容、教材の形式等が授業形態に合致しているかを、当機関と各科目担当講師で検討する。
- (4) 上記(2)(3)は講座の中で試用し、反省を踏まえながら随時改訂・改善していく。
- (5) 教育実習担当講師と教材開発・検討委員会によって、実習内容（指導項目など）、形態（模擬実習か対外国人の教壇実習かなど）、回数、時間等の詳細を検討する。なお、必要に応じて実習項目分析のためのワークシートや授業サンプルとなる DVD 等の視聴覚教材を作成する。2018 年度の初級教材作成に続き、2 年目となる 2019 年度は中級・上級教材の作成を中心に行う。

5-2. 実際の検討過程

まず、【理論講座】の教材について記述する。

教材の考え方としては、①養成講座実施機関オリジナルの教科書を作成する、②市販の教材を教科書として採用する、③としては①②の折衷で、一部科目で機関オリジナルの教科書を作成し、その他の科目では市販教材を使用する、などが考えられる。いずれの形にもそれぞれのメリット、デメリットがあるが、当機関では、②の市販教材を採用する方法を取ることとした。その理由および授業実施に当たっての教材については以下のとおりである。

理論講座の各科目の講義を専門性の高い講師が担当し、講義内容に照らした上で、市販教材の中から最適なものを選択している。それぞれの分野の最新動向を反映した内容とするには、市販教材を活用するのが有効であると考え。科目担当講師の中には自著を教科書としている場合もあり、より適正な理解の下で授業が行われていると言える。

また、各学期の終了後、養成講座実施者である当機関と各科目担当講師との間で協議し、講義内容によりふさわしいものを使用するようにしており、2019 年度中にも、いくつかの科目で教材の変更を行った。変更の小回りが利く点は市販教材を使用する大きな利点であろう。

授業で使う教材は、各科目担当講師が、教科書、スライド、ハンドアウト等の補助教材を、

目的と状況に合わせてながら使用することを確認した。教科書とハンドアウトはそれぞれの受講生が手元に置いて使用、スライドは本校とサテライト教室とで同時にモニターに投影することで共有することとしている。

授業の形態が講義形式か、ゼミ形式か、ワークショップ形式か、あるいはそれらを併用する形式かにより、ZOOMでの配信のしかたに工夫が必要であった。科目担当講師との講義前の打ち合わせにより、配信方法を検討してきたが、実際の授業は想定外の事態にその都度対応しながらの実施となった。状況を改善するため、本校の教室にいる受講生の声を拾うシステムをハンドマイクから集音マイクに切り替えたり、講師を映すことのみを目指していた Web カメラを、教室活動の様子全体を撮影できるカメラに切り替えることにより、多くの問題点は改善できるようになった。しかし、高品質の講座を受講生に提供するため、更なる改善をしていこうと考えている。

上記のような状況を考えると、当機関の養成講座の理論講座では本事業内での教材作成を行う必要性を強く感じることはないため、引き続き、市販教材を使用し、ハンドアウト等を配布しての講義を今後も行う方針を取ることとした。

そこで、本事業では、【実践講座】特に教育実習に係る教材の作成をすることとした。

具体的な作成教材についての報告の前に、当機関における日本語指導についての基本的な考え方について説明しておきたい。

到達目標となる目標言語でのコミュニケーション能力というのは、送り手である「私」の「伝えたいこと」を言葉という媒体を通じて「相手（受け手）」に伝え、「相手（送り手）」の「伝えたいこと」を受け手である「私」が言葉の媒体を通じて受け、解釈／解読できる能力をいいます。コミュニケーションは「伝えたいこと」のやりとりです。送り手は「伝えたいこと」を言葉に託して送りだし、それを受け手が解読する、すなわち、送り手が「伝えたいこと」を想起し、それを言葉に変えて音声もしくは文字で言語化し、それを受けた受け手が解読し、送り手の伝えたいこと理解し、了解し、それが連続していく過程です。「伝えたいこと」を担って音声なり、文字なりで言語化された総体を「発話文」と呼び、発話文を作る活動を発話活動と呼ぶこととします。（『実践手引書』インターカルト日本語学校日本語教員養成研究所）

表現形式の使用は、クラス全体で、ある話題をめぐる対話を作って実践させたいと考えます。発話したくなるように、すなわち「伝えたいこと」を想起するように「追い込み」それにふさわしい表現形式の指導をしていきます。仮に、その表現形式が未習であれば、導入となり、既習であれば、フィードバックとなります。それによって、「伝えたいこと」

との関連が確実なものとなっていきます。（『Fundamental Japanese for Expressing Ideas』山田あき子著「指導内容と方法」より）

このように、「伝えたいこと」があり、それを言語化するというのがコミュニケーションの基本と考えている。日本語指導をしていると、学習者から「勉強はしたけれど、使えない」「型は作れるようになったが、いつ使えばいいのかわからない」という声をたびたび聞く。これは、「伝えたいこと」と言語形式が結び付いていないために起こるのではないかと考えられる。

前に引用したように、当校の言語指導の考え方を支えるものの一つに「追い込み」というのがある。話し手に「伝えたいこと」があるが、それを伝える言語形式を知らない、という状況を意図的に作り出すのである。話し手が「伝えたいこと」を伝えるために必要な言語形式を提示することを「導入」と考える。

本事業の1年目となる2018年度の課題として、この指導項目の「導入」の助けとなる教材を作成することとした。

5-3. 初級教材の作成

初級の指導項目は使用教科書に関わらず一致するものが多く、その導入においてもある程度パターン化されたものを示すことが有効であると考えられる。そこで、事業1年目に当たる2018年度には、初級指導を行う際に参考となる教材として、指導項目の導入のためのサンプル動画と教案の例を作成することにした。

項目導入に当たっては、まず取り上げる基本となる項目「30」を選択する。

この指導項目基本30について、「日本語教育の実践Ⅰ（初級指導）」の中で分析を行い、指導方法について意見の交換と共有を行うが、授業の前に「項目分析シート」に記入して授業に臨むこととした。項目分析シートの記入に当たっては、理論講座の文法の授業を参考にしながら、まず自分で考えることを前提とする。その後、授業での受講生同士の意見交換の中でシートを完成させ、授業の中で完成させる。

・教材1 初級実習項目一覧

1	～ています（動作の継続）	14 課
2	～てください（テ形）	1 課
3	指示詞	2 課
4	動詞（～をV）	3 課
5	あげます／もらいます	4 課
6	あります／います（存在文・所在文）	5 課

7	形容詞（イ形容詞・ナ形容詞）	6 課
8	～たいです（マス形）／ほしいです	7 課
9	～てもいいですか／てはいけません	8 課
10	A と B とどちらが…ですか／A のほうが…です／～（の中） で何が一番…	9 課
11	～ないでください（ナイ形）	12 課
12	N ができます／～ことができます（辞書形）	13 課
13	可能形	14 課
14	～なければなりません／なくてもいいです	15 課
15	～くなります／～になります（変化表現）	17 課
16	～たことがあります（タ形）	18 課
17	くれます／～てくれます	19 課
18	～と思います（推量／意見）	22 課
19	連体修飾節	26 課
20	～たら／～ても	27 課
21	～てしまいました（後悔、反省）	28 課
22	～かもしれません	29 課
23	受身	33 課
24	～てあります（状態）	38 課
25	～ておきます（準備）	44 課
26	～そうです（様態）	45 課
27	～そうです（伝聞）	47 課
28	使役	48 課
29	敬語①尊敬語	49 課
30	敬語②謙譲語	50 課

・教材 2 初級実習 指導項目分析用シート

「みんなの日本語 I・II（本冊）」「みんなの日本語 I・II 文法解説各国語版」を参照しながら、当該項目が教科書のどこに出ているか、どのような説明がされているのかを確認しておく。同時に提示する例に未習語がないかも確認する。

また、初級レベルの日本語指導の基本として「身近なことを表現できる」と言うことが挙げられる。導入や例文を考える際に、それが身近な話題であるかどうかというのも重要な点の一つである。

日本語指導の最も重要なポイントの一つに指導項目の「導入」がある。当機関の日本語指導の基本となる考え方では、学習者が「伝えたいこと」を想起させるようにすることが肝要であるとしている。つまり指導項目は必ず学習者が発話することになる。「言いたいと言えない（言い方を知らない）」という状態で導入するので、指導項目を教師が発話するのではないという点に注意すべきである。

そこで、以下の教材を作成することにした。

- ・教材 3 初級実習 導入①（教案）
指導項目：～てください／学習目標：簡単な依頼ができる
動画あり
- ・教材 4 初級実習 導入②（教案）
指導項目：A と B とどちらが…ですか／学習目標：身近なことの比較ができる
動画あり
- ・教材 5 初級実習 導入③（教案）
指導項目：～てもいいですか
学習目標：①規則上許容されているかを尋ねることができる
②許可を求めることができる
動画あり
- ・教材 6 初級実習 導入④（教案）
指導項目：～てはいけません
学習目標：禁止されていることを伝えることができる
動画あり
- ・教材 7 初級実習 導入⑤（教案）
指導項目：～なければなりません
学習目標：規則によって義務づけられていることが確認できる
動画あり

これらの教材は、指導項目を導入する際の授業サンプルの教案と動画である。その日の指導項目を学習者が言う（まだ言い方を知らないのだが）ように仕向けるのである。

「伝えたいこと」を表現するために必要な言い方を導入することで、「言えた」という感覚を持たせることが大切である。導入によって形を示すだけでなく、正しく言えるようにさせることが大切である。口が回りにくい難しい表現も、言えるまで繰り返す。

初級授業のための教案には、教師の発話をすべてそのまま書き込むことを勧めている。また、教師の発話に対する学習者の反応も予測されるものをすべて書くように指導している。出来上がった教案全体を見たときに、発話が教師に偏っていないか（教師が話しすぎていな

いか)を確認するための材料となる。また、授業を計画どおりに進めるにも教案にはできる限り詳細に記入しておくことが望ましいと思われる。ただし、実際の授業に臨む際には教案から離れることができるように入念なりハーサルが必須である。学習者を見ずに、教案を目で追いながら（教案を読みながら）自然なコミュニケーションをとることは不可のである。

項目指導において「導入」が大切であることは確かだが、それだけで授業ができるわけではなく、授業全体の流れを理解する必要がある。

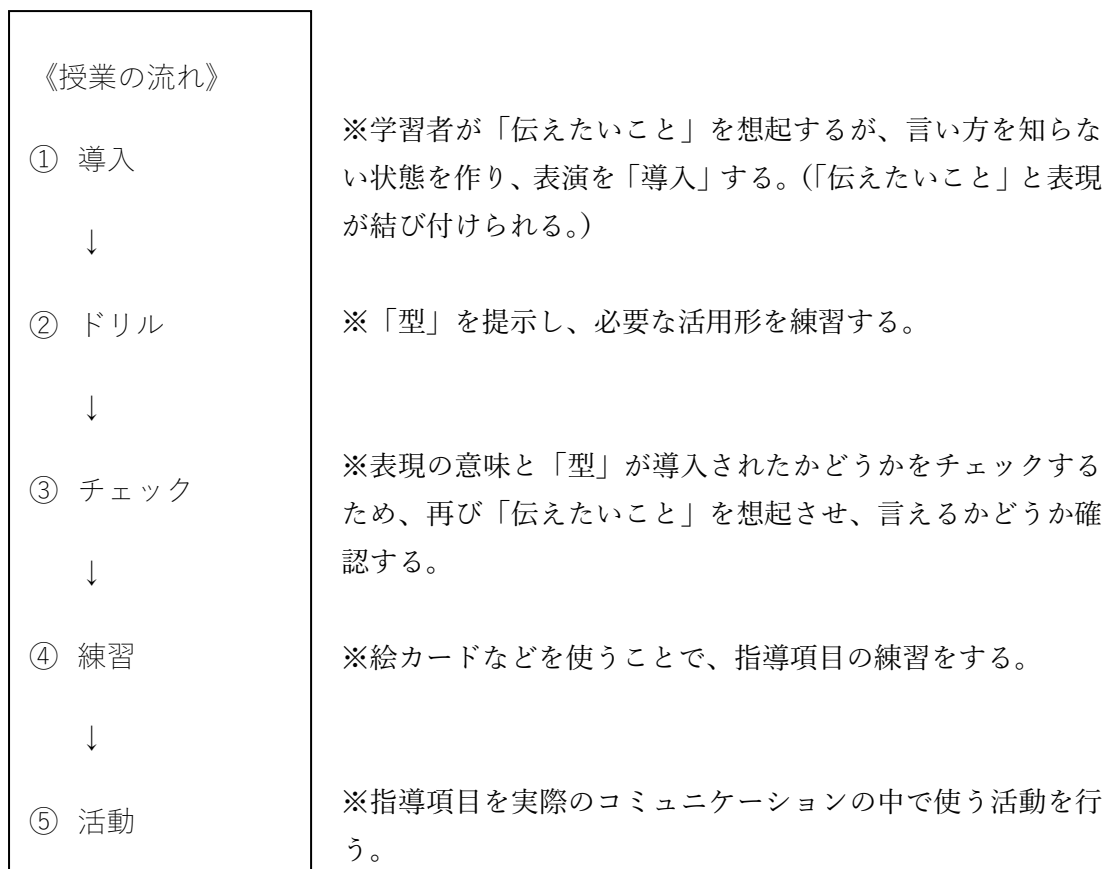
そこで、一つの項目指導の導入から活動までの授業の流れがわかる動画を作成した。

・教材 8 初級実習 授業の流れ（教案）

指導項目：～たことがあります／学習目標：経験の有無について話せる

動画あり

当機関で実践している授業の流れは下図のとおりである。



「伝えたいこと」があるが、その言い方がわからない状態で「導入」を行う。その導入によって自分が言いたいことを言うための「型」がわかる。意味と型が結びつければ、次に最初と類似する「伝えたいこと」が想起されたときには、今度は自分で発話することができるで

あろう、と言う考え方である。その「型」を提示し練習するのが「ドリル」で、本当に意味と型が結びついて、想起した「伝えたいこと」を自ら言えるようになったかを「チェック」するのである。

その後、絵カードや画像を利用して何度も言う「練習」を重ねる。流れの最後では現実のコミュニケーションに近い状況で話す練習をするのが「活動」で、インフォメーションギャップを利用した会話や、ロールプレイなどを行う。

このような一連の流れをもった授業を円滑に、かつ効果的に実施するためには、「導入」以外にも様々なスキルを身に付けておくことが求められる。「日本語教育の実践Ⅰ（初級指導）」「教育実習Ⅰ（初級）」の中では、下記のようなスキルが身に付くように指導するようにしている。

・教材 9 初級実習 スキルで扱う内容

初級授業を行う際に、必要なスキルとして、

① 教案の書き方

発話が教師に偏っていないか、未習語を使用していないか、話題が身近なものになっているかなどを授業前に確認することができる。

また、教案は授業後、次の授業に向けて重要な意味をもつものであるということを認識する。

② 板書のしかた

学習者に背をむけて、黙々と書き続けていないか。文字の大きさはどのくらいがいいか、文型のどの部分を書くのか、色を使うのか、下線を引くのかなど、効果的な板書をするには考慮すべき点が多い。

③ 活用形の導入、練習のしかた

動詞のどのグループから提示するのか、練習が単調にならないようにどのような工夫が必要か。

④ フラッシュカードや絵カードなどを使った活用練習のしかた

カードのサイズ、厚さ、文字のサイズ、フォントの種類など、どのようなものがフラッシュカードに適しているか。カードの持ち方、めくり方はどうするか。

⑤ 教科書の練習や絵カードなどを使った練習のしかた

自分が想起した「伝えたいこと」だけでなく、多くの文を口に出して試してみる練習が必要。教科書の「練習」のやり方、指示の出し方も具体的に考える。

⑥ インフォメーションギャップを利用した活動やインタビュー、ロールプレイやグループワークなどを行うことで、現実のコミュニケーションに近い活動の行い方などについて取り上げる。

練習や活動を行う際、大切なことの一つに、いかにして指示の内容を伝えるかということがある。今やさまざまな教材が出版され、興味深い活動も数多く紹介されるようになってきた。しかし、難しいのはその活動の実施のしかたをいかにして学習者に伝えるかである。語彙や文法の未習・既習をきちんと意識し、適切なティーチャートークを行うことはたやすいことではなく、訓練が必要なことだということに気づくべきである。

教育実習の評価の観点をあらかじめ示しておくことが重要である。自分が行う実習がどのような基準で評価されるかを事前に示すことによって、授業を行う際に何が大切なのかを考えるようになり、また他の受講生の実習を見る目が養われると考える。

- ・教材 10 初級実習 相互コメント用紙（受講者用）
- ・教材 11 初級実習 評価用紙（教師用）

5-4. 中上級教材の作成

2 年目となる 2019 年度の教材作成では中級教材の作成を課題とした。1 年目で取り組んだ初級レベルの指導項目は、使用する教科書が異なっても項目そのものはほぼ共通しているため、動画による導入パターンの提示が有効であると考えた。

しかし、中級以上のレベルでは扱う表現項目や語彙などが多様で、教科書によっても取り上げられる指導項目のバラエティが初級とは比較にならないほど多様である。そのため、パターン化した教材を提示するより、指導の基本となる考え方を具現化した教材、指導ポイントのおさえ方を理解するための教材を作成することが、より有益なのではないかと考えた。

中級の語彙指導では、まず初級で扱う語彙と中上級で取り上げる語彙との違いを考え、どのように意味を伝えるかの練習をする教材を作成した。

- ・教材 12 中上級指導 語彙分析シートと使い方
感情を表す語、漢語動詞の導入のしかたを考える。

- ・教材 13 中上級実習（語彙）課題

課題として提示するのは、日本語能力試験タイプの空欄補充の問題（択一式）1 問である。その問題を試験対策ではなく、4 つの選択肢を導入するということを実習課題とした。また、その 4 つの語を使った練習問題を作成するのが教材作成としての課題である。

授業では初級語彙と中上級語彙との違い中級以降の語彙の導入でも、初級での導入の考え方と共通する部分は大きい。単に意味を解説するのではなく、その語が必要となる状況を作ることで、使い方を理解するように導入することを目指したいと考える。

例えば課題例の中の「生える」「抜ける」を挿入する場合であれば、「歯」の話をするのはどうだろうか。

教師：皆さんは生まれたときに歯がありましたか？

学生：いいえ。

教師：でも、今は歯がありますね。

学生：1 歳ごろに… 「生えました」を導入。

教師：今の皆さんの歯は子供の時の歯ですか。

学生：いいえ。小学校 5 年生ごろに今の歯になりました。

教師：子供の時の歯は？

学生：今の歯が生える前に… 「抜けました」を導入。

このようなやり取りの中で、その語を使うべき状況を作ることを導入の基本とすることができるとは思わないかと思う。ただし、すべての語がこのような導入のしかたに適しているわけではなく、例えば動画を見せることで手っ取り早く意味を伝えることができる語もあるであろう。6 種類の課題の導入を考えることで、さまざまな導入法を体験できるようにすることが目的である。

・教材 1 4 中級実習漢字分析シートと使い方

漢字圏学習者と非漢字圏学習者では同一の漢字を指導する場合でも提供すべき情報は異なるはずである。どのような準備をするかを考える教材を作成した。

・教材 1 5 中級漢字練習用ワークシート（例）と作成ポイント

漢字授業で使用するワークシートの例と作成ポイントを教材化した。非漢字圏学習者に対して使用する場合の注意点やフォント使用に対する配慮も必要になる。

・教材 1 6 中上級実習表現分析シートと作成ポイント

中上級の表現分析の際に着目すべきポイントと注意点をまとめた。

・教材 1 7 中上級実習表現練習プリント作成例と作成ポイント

表現練習をどのような段階を踏んで指導していく必要があるかを考えることが課題となる。

・教材 1 8 中上級表現 教案用紙

初級の授業のための教案は教師が話す言葉をすべてそのまま書き込むことを推奨するが、中上級ではすべてを書く必要はないと考える。その理由は、教師の発話に対する反応が、初級の学習者に比べて中上級の学習者は予測するのが難しく、教案に事細かに記述してもその通りに進む可能性は低いという点にある。かといって中上級の授業を行う際に教案が不要であるということではない。学習者に対してどのような情報をどのような言葉で提示するのか、その内容と使う表現は明確にしておくべきであると考え。この準備がしっかり行われていないと、説明が難しく要領を得ないものになってしまいがちなので注意が必要。

・教材 1 9 中上級実習評価用紙（教師用）

・教材 2 0 中上級実習相互コメント用紙（受講者用）

初級実習同様、評価の基準を事前に示すことが必要である。

・教材 2 1 中上級授業見学シート

当機関では併設の日本語学校の中上級の授業を見学するプログラムを設定している。初級のクラスについては初級授業で経験してきたことから、どのような授業が行われるのか想像しやすいということと、DVD 等を通じてデモンストレーション授業を見る機会があるのだが、中上級のクラスでどのような授業が行われているかは全く想像がつかないという声を受講者から常に聞いてきた。

そこで、中級後半から上級にかけてのクラスを見学する機会を計画したのだが、ただ漫然と見ているだけということにならないように、授業見学シートの記入を課すこととした。

まず見学の前に、どのような観点で見学するかを記入する。また、見学して気づいたことや、得られたことを書いて提出するというようにした。

授業見学シートの効用だけでなく、理論講座で学んだ机上の知識が、現場でどのように生かされているかを目の当たりにしたという声もあり、授業見学そのものの意義も感じられる。

初級クラスのイメージとは全く異なるクラスを見学することから大きな刺激を受けることが多いようで、いつも反響は大きい。

シーに書かれていた受講生の声のいくつかを、以下に紹介する。

〈中上級授業見学シート〉より

① どのような観点で授業を見学しようと思うか

- ・多国籍の学習者をどのようにまとめて授業を進めるか/非漢字圏と漢字圏の学習者への対応の差異
- ・文法、語彙、表現の理解のさせ方
- ・学習者への発話の促し方
- ・学習者の集中のさせ方
- ・中上級へ進んでからのモチベーション維持のためにどんなことを行うか
- ・学習者の誤りをどのように指摘し、正解をどのように説明するのか

② 見学して気づいたこと

- ・学習者の細かい発話までしっかり聞き取り、対応している（誤用など）
- ・幅広い文法項目について初級項目に戻り、確認しながら進めている
- ・新しい表現などを説明する際は身近な例を挙げたり、学生自身の経験を話させそれを基に説明している
- ・うまく発話できない学習者にはあまり多く話させることはしないが、必ず当て言わせている。もしくは周りの学習者にヘルプさせている。

- ・今日の目標を最初に提示して、学習者に緊張感を持たせている

③授業見学から得られたこと

- ・例文をストックすることの大切さ
- ・日常の出来事を教材として使用できるかどうか、アンテナを張ることの大事さ
- ・教師自身の幅広い知識が必要ということ、そして事前準備の大切さ
- ・学習者が言いそうな答えを予想し、それに準備することの大切さ
- ・学習者にレベル差があるので、それぞれの学習者に合わせた質問をすること
- ・重要な部分かそうでない部分か、声の強弱でポイントを明確にし、効果的に語彙を導入している
- ・学習者のキャラクターを知り、それを授業にいかしている

などの声があった。授業見学に対して受動的な態度で臨むのではなく、能動的な活動としてとらえるように仕向けるためには、見学シートの記入は効果的であると考える。

生の現場を見学する機会は、中上級のみで、初級クラスの見学は動画にとどまっている。日本語学校と養成講座の時間帯の関係で、初級授業見学がなかなか実現できずにいるが、要望は常にあり、課題の一つとなっている。

6. 養成・研修の実施

6-1. 養成・研修の目標

国内外で増加かつ多様化する日本語を必要とする者に対する日本語指導を行うための基礎となる知識・技能・態度を身につけ、それぞれの教育現場で定められた日本語教育プログラムに基づいた日本語教育を行うことのできる人材を養成する。

「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版」に示された「日本語教師【養成】における教育内容」の中の「必須の教育内容」を満たし、かつ、十分な教育実習によって知識に偏重することなく実践力を身につけた日本語教師を養成する。

6-2. 養成・研修内容の概要

（教育内容）

「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版」の「日本語教師【養成】における教育内容」で示された「必須の教育内容」50 項目を満たす養成講座を実施した。当機関の 2017 年度までの日本語教師養成 420 時間コースは旧カリキュラムに基づいたものであり、上記「必須の教育内容」を充足していなかった。そのため、まず欠けている内容、不十分な内容を補ったうえで、さらに当機関の養成講座を特徴づける内容を加えて全体を構成することとした。

なお、「日本語教育人材養成・研修の在り方について（報告）改定版」の中に指摘されている、「日本語教育機関側から日本語教師の実践力が不足しているとの指摘がある（p.13）」という点に鑑み、当機関の日本語教師養成の特徴でもある教育実習関係の科目に力を入れた講座内容とする。

具体的には、100 単位時間を教育実習科目に充当し、初級授業、中上級授業それぞれについて、

- (1) オリエンテーション
- (2) 授業見学（併設日本語学校の実際の授業、ビデオ観察を含む）
- (3) 授業準備
- (4) 模擬授業
- (5) 教壇実習
- (6) 教育実習全体の振り返り

を行う。

また、教育実習関連科目として、「日本語教育の実践Ⅰ～Ⅲ」において教育実習を行う項目の分析等を行い、当該項目を授業で扱う際の留意点などについても指導する。

理論科目は、対面授業（通学）と ZOOM を活用したオンライン授業を並行して行い（平

成 31 年度での全科目 ZOOM}利用を目指し、平成 30 年度は一部の科目で試行)、実習関係科目は対面授業のみで実施する。

2 年目となる 31 年度は理論科目のすべてを ZOOM を利用して実施することを目標とする。

（履修状況（出欠や成績等）の確認方法）

履修状況は、

（1）対面で行われる授業では、毎時間出欠の確認を行う

（2）オンラインで行われる授業では、オンタイムでの受講は入室状況を確認し、録画受講の場合は、科目ごとに受講状況確認票（予定）の提出を求めることで確認する。

成績は、理論科目はすべて試験または課題（レポート等）で評価する。

また、教育実習は実技により達成度を測り、評価する。

（修了要件）

理論科目の試験により評価する科目においては、すべての試験で 70%以上の成績であること。

理論科目の課題（レポート等）により評価する科目においては、すべての課題で合格水準に達していると認定されること。

実習科目においては全授業の 90%以上に参加していること。

オンライン授業の場合は、すべての授業に参加または録画視聴していること。

2018 年度 10 月期に、試験的にオンラインシステムを利用した授業を実施すること（外部への配信はせず）で、当該システムが各科目の特性に合致するものであるかを、ある程度つかむことができたが、2019 年度 4 月期の久留米サテライトへの試験的配信により、科目ごとの授業スタイルに合わせたシステム活用の工夫の必要性がより明確になった。

さらに、2019 年度 10 月期には福島サテライトへの本配信を行うことで、授業形態（講義形式か、ゼミ形式か、ワークショップ形式か、それらの融合か）に合わせた配信をより適切に実施するための設備更新を順次行っている。

音声・画像の不具合を改善するために使用機器の更新を行い、更なる品質の向上を目指している。この状況については 6-5. で改めて記述する。

6-3. 科目ごとの実施状況

理論講座から科目ごとに記述する。

【理論講座】主に前半の 3 カ月に設定される。*（ ）内は 2019 年度 10 月期現在の担当講師

◆日本語教育概論：4 単位時間（西原鈴子）

必須の教育内容（50 項目）との対応：

- （1）世界と日本の社会と文化
- （2）日本の在留外国人施策
- （5）言語政策
- （7）世界と日本の日本語教育事情
- （20）日本語教師の資質・能力

目標：日本語教育とは何か、日本語、学習者、日本語教師、言語教育などの観点から日本語教育の全体像をつかむ。

授業内容：

- ・日本国内の日本語教育ニーズ
- ・海外の日本語教育ニーズ
- ・世界の言語教育の潮流
- ・求められる日本語教師像

評価：レポート

授業形態：講義形式

実施について：ZOOMを利用した授業により、サテライト教室と双方向のコミュニケーションが可能であり、システム上の基本的な問題はないと思われる。ただし、当初、講師の発話は講師の装着するピンマイクによって拾い、受講生の声はハンドマイクで拾うというシステムで実施していたため、マイクが回る時間が微妙なロスとなることが生じた。この問題を解決するために集音マイクの設置をする方法に切り替えることにしたが、マイクの感度や設置場所などの問題を解決する必要性が生じたが、何度かの試行の後問題はほぼ解決されたと考えている。

◆日本語教育事情（世界と日本）：4 単位時間（神吉宇一）

必須の教育内容（50 項目）との対応：

- （1）世界と日本の社会と文化
- （5）言語政策
- （7）世界と日本の日本語教育事情

目標：日本語教育を取り巻く社会的状況について、政策的動向や地域社会の事例をもとに概観する国内で就労する外国人や、地域で生活する外国人に対する日本語教育の現状と課題について概観し、問題点と今後の展望について考える。

授業内容：

- ・日本社会における外国人の動向
- ・政策的動向

- ・地域の日本語教室の機能、役割
- ・日本語教育の社会的役割

評価：レポート

授業形態：講義形式、一部グループワーク

実施について：講義形式の部分では、ZOOM配信による授業に問題はない。グループワークでは、サテライト教室を一つのグループとすることで、活動そのものは円滑に行うことができたが、東京の教室で行われている活動の様子がサテライトにうまく伝えることができず、分断した形での実施となった。

東京の教室の様子を映すカメラを web カメラから教室全体を映すことのできるカメラに変更することにより改善を図ることができると考える。

◆日本語教育事情（地域）：4 単位時間（萬浪絵里）

必須の教育内容（50 項目）との対応：

（3）多文化共生（地域社会における共生）

目標：「地域日本語教室」では、誰が何のためにどのような活動をしているのだろうか。

現状、意義、今後の可能性、課題について、活動の具体例やワークを通して考える。また、「地域」における日本語学習活動を知ることが、日本語教師にとってなぜ必要かについても考察する。

授業内容：

- ・地域日本語教室の枠組み、機能と意義
- ・教室参加者の属性、ニーズ
- ・日本語ボランティアと外国人参加者の関係性
- ・事例紹介
- ・「学習支援」と「相互理解」
- ・コミュニケーションスキル（「聴く」、「待つ」）
- ・活動素材
- ・日本語教師が「地域」から学ぶこと

評価：レポート

授業形態：講義形式

事前課題：

- （1）居住地または勤務先の市区町村の在住外国人数、人口比、国籍、在留資格別構成
- （2）自治体による多文化共生施策、日本語学習支援策の状況について調べる。

実施について：授業そのものはZOOM配信を含め大きな問題はない。事前課題は講座時間外に各自が取り組む必要があり、課題にかけられる時間に個人差が生じる可能性がある。現状では問題は発生していないが、時間が取れないという受講者が出てくることも考え

られる。

◆日本語教育史：4 単位時間（神本令子）

必須の教育内容（50 項目）との対応：

（4）日本語教育史

目標：現在行われている日本語教育が、先人たちのどのような試行錯誤の上に成り立っているのかを知る。特に、近現代の日本と近隣諸国の関係を日本語教育の歴史を通して理解することで、学習者について知る手がかりとする。

言語政策としての日本語教育史を学ぶことで今後の日本語教育のあるべき姿を考えることのできる素地となる力を養う。

授業内容：

- ・キリシタン宣教師による自学自習が遺したもの
- ・江戸時代～明治時代

鎖国とオランダ商館

海外：朝鮮王朝『捷解新語』／ロシア漂着民を利用した日本語研究

国内：大使館外交官等の日本語学習

戦前・戦中

清国留学生、弘文学院

国学＝古典文学の国文法の研究

帝国主義のよとの日本統治国での日本語教育

大東亜共栄圏

台湾／朝鮮半島／中国大陸／アジア諸国

戦後・未来

海外技術研修員のために／国際交流のために⇒働き手のために／児童のために

日本語教育能力検定試験

日本語能力試験と C E F R

評価：テスト（1 単位時間）

授業形態：講義形式

実施について：実施上の問題点は特にない。ZOOM による配信も講義形式の授業では問題なく実施できる。

◆文法：38 単位時間（沼田宏）

必須の教育内容（50 項目）との対応：

（39）日本語教育のための日本語分析

（43）日本語教育のための文法体系

（45）日本語教育のための語用論的規範

目標：日本語を外国人（非母語話者）に教えるために知っておくべき日本語の構造や規則を整理することを目的とする。日本語母語話者が無意識のうちに習得してきた日本語の「規則」を意識化し、日本語を外国語として分析できる目を養っていく。後半では、日本語指導の現場で必要となる表現指導についても扱う。

授業内容：

- ・ 文法とは何か／学校文法と日本語教育文法／品詞分類／文の種類
- ・ 表現形式と表現意図／基本表現形式を知る
- ・ 動詞の活用／日本語文法の捉え方／日本語教育における動詞のグループ分け
- ・ 名詞・指示詞／ウナギ文／指示詞（こ・そ・あ）
- ・ 格助詞の役割と主な用法／格助詞表現比較
- ・ 「は」と「が」の用法比較／取り立て助詞とは
- ・ 形容詞の活用／形容詞の分類
- ・ 副詞の種類（情態副詞・程度副詞・陳述副詞）
- ・ アスペクトとは／「～ている」の分類／「～ている」と「～てある」の比較
- ・ 動作性述語と状態性述語の表すテンス／非過去
- ・ 動詞の分類／動態動詞と状態動詞／意志動詞と無意志動詞／金田一分類など
- ・ ヴォイスとは／受身表現／直接受身と間接受身／非情受身／強制使役と許可使役など
- ・ ムード（モダリティ）とは／対事的ムードと対人的ムード／さまざまなムードの表現
- ・ 複文／さまざまな従属節
- ・ 原因理由を表す節／「～から」「～ので」「～て」の比較
- ・ 条件節「～たら」「～ば」「～と」の用法／「～たら」と「～なら」の比較
- ・ 授受表現「あげる」「もらう」「くれる」／恩恵のやりとり
- ・ 可能表現／可能形／能力可能と状況可能／「～ことができる」
- ・ 変化表現／「～くなる」「～になる」「～ようになる」「～なくなる」／変化動詞
- ・ 敬語／敬語の指針／尊敬語、謙譲語Ⅰ・Ⅱ、丁寧語、美化語／敬語の使い方 など

評価：テスト（1 単位時間）

使用教科書：『考えて、解いて、学ぶ 日本語教育の文法』原沢伊都夫著（スリーエーネットワーク）

授業形態：講義形式

実施について：講義形式が中心となるため、ZOOMによる配信には問題ない。単位時間数に比べて内容が多すぎる感はあるが、日本語教師養成講座内で実施される「文法」の授業は単に日本語の文法的知識を注入するだけでなく、実際の日本語教育の現場に関連付けることに意義があると考え、そのためには必要な内容であると思う。他の科目とのバランスを調整することで現状よりも4～6 単位時間程度増やすことができるとより効果的な実施が可能になるのではないかとと思われる。

◆音声：24 単位時間（石澤徹）

必須の教育内容（50 項目）との対応：

- （39）日本語教育のための日本語分析
- （40）日本語教育のための音韻・音声体系

目標：日常気づかれにくい話し言葉の特徴を知り、学習者の発音を音声学的に分析するための基礎的な力を身に付け、日本語教育的にどう対応していくか理解することを目標とする。音声記号や名称の暗記だけに心を砕くのではなく、その背景にある原理を理解する。

授業内容：

- ・ガイダンス、五十音図とその拡大表
- ・話し言葉の語形、母語の干渉、誤用分析
- ・母音の分類、子音の分類、アクセントの感覚と表記、アクセントの式と型
- ・イントネーション、唇音退化・ハ行転呼、四つ仮名
- ・拗音・環境による音声変化、プロミネンスとポーズ
- ・音節構造、音声教育の現状、まとめと復習

評価：テスト（中間テスト・修了テスト）（1 単位時間）

使用教科書：『日本語教育 よくわかる音声』松崎寛、河野俊之著（アルク）

授業形態：講義形式、一部グループワーク

実施について：科目の性質上音声データや画像を使用することがあるが、ZOOMのシステム上大きな問題とはならなかった。画像や音声データの共有は講師のPCスキルに頼らなければならぬ部分はあるが、リハーサルを行うことで解決できることである。グループワークをサテライト教室といかに一体感を持って実施できるかという点は今後検討する必要があるが、カメラの変更によりグループ活動中は東京の教室全体の様子を映し出すことができるようになり、グループワークの雰囲気を伝えることについては可能になった。

◆語彙：16 単位時間（有賀千佳子）

必須の教育内容（50 項目）との対応：

- （39）日本語教育のための日本語分析
- （42）日本語教育のための形態・語彙体系
- （44）日本語教育のための意味体系

目標：日本語の語彙全般に関する知識、および、語彙教育の対象である「語彙項目」を分析する能力を身につける。個々の語彙項目の持つ用法を詳細に観察・分析する力を養うとともに、それを日本語語彙全体の中で位置づけて考える習慣を身につけることを目的とする。

また、学習者（非母語話者）の立場に立って、彼らにとって困難な点や誤用を予測し、より効果的な語彙指導の方法を自ら考える力をつける。同時に、既存の語彙資料や語彙教

材に実際に目を通し、それらを評価する目を養う。

授業内容：

- ・「語彙」「語彙教育」「語彙力」とは何か
- ・「語彙項目」をとりまくことがら（音声、文法、意味、表記、言語行動、……）
- ・語彙のレベル感をつかむ（日本語能力試験を参考に）
- ・語の意味・用法について考える（誤用分析をもとに）
- ・各種語彙資料紹介（国語辞典を中心に）
- ・参考文献紹介
- ・語を教える・・・語彙調査、単位切り
- ・さまざまな言語単位について
- ・語彙教育について（レベルによる内容の違い、語彙教育の方法、語彙学習教材、など）
- ・語彙項目分析練習（意味分析、用法分類、類語比較分析、例文の妥当性、など）
- ・まとめ

評価：テスト（1 単位時間）

使用教科書：『日本語教育 よくわかる語彙』秋元美晴 ほか著（アルク）

授業形態：ゼミ形式

実施について：ロの字型の座席配置により、東京の教室に在籍している受講生全員が互いの顔を見てのコミュニケーションが可能になっている。受講生の声を拾うマイクは、他科目と同様にハンドマイクから集音マイクへの変更を行うことで、マイク回しのロスやマイクなしの発言などを回避することができるようになったが、集音マイクの設置位置などについては独自の工夫が必要となる。

◆文字表記：16 単位時間（神本令子）

必須の教育内容（50 項目）との対応：

（39）日本語教育のための日本語分析

（41）日本語教育のための文字と表記

目標：日本語学習の4つの技能のうち、「読む、書く」を担う文字（表記）を、まず日本語学習者に教えるものとしてとらえることから始める。

教える際に持っていなければならない基本的知識を習得し、学生が実際に読める、書けるようになるためにいかに教えるかが、この授業の目的である。そのために、教える場での教師の役割を中心的に考えていきたいと思う。現在、実際に使われている文字（表記）を的確に分析し、有効な「文字指導」の仕方を模索したい。

特に、日本語学習者にとっていろいろな面で困難さを伴う漢字については、できるだけ効率的に教える方法を、見つけていきたい。

授業内容：

基本的知識＝日本語の表記の特徴／漢字について（常用漢字、漢字の成り立ち・六書、音

読みの変遷・音読みと訓読み）／仮名について（送り仮名）

平仮名について（現代仮名遣い）

実践的知識＝漢字の教え方（多様な読み・音変化、非漢字圏学習者への指導法）／

ひらがなの教え方／カタカナの教え方

評価：テスト（1 単位時間）

使用教科書：『文字表記』（インターカルト日本語教員養成研究所）、『新しい国語表記ハンドブック第 8 版』（三省堂）

授業形態：講義形式

実施について：授業実施についてもサテライト教室への配信についても大きな問題はない。マイクについての問題は他科目と同様。

◆言語学概論：6 単位時間（田川拓海）

必須の教育内容（50 項目）との対応：

（37）一般言語学

目標：日本語の研究について理解し各分野の方法論を身に付けるには、その基盤・前提となっている言語学について理解することが必要である。しかし、「言語学」とは何なのか（あるいは何ではないのか）ということ把握するのは意外と難しく、また用いられる概念・用語にも抽象度が高く一般的に難解であると思われるものが多い。この授業では、言語学における重要な概念や考え方について、日本語の研究とのつながりを具体的に取り上げながら身に付ける。

授業内容：

・言語と言語学

言語学の範囲/言語学は何をするか・何をしないか/言語学の目的と言語学の分野

・言語の一般的特徴

記号としての言語/恣意性/二重文節性と言語の単位

・日本語はどのような言語か

言語の系統と比較言語学/日本語の系統

評価：テスト（1 単位時間）

授業形態：講義形式

実施について：授業の実施においても ZOOM による配信に関しても特に問題なく実施できた。マイクの問題は他の科目と同様。

◆対照言語学：6 単位時間（田川拓海）

必須の教育内容（50 項目）との対応：

（38）対照言語学

目標：日本語の研究について理解し各分野の方法論を身に付けるには、その基盤・前提とな

っている言語学について理解することが必要である。しかし、「言語学」とは何なのか（あるいは何ではないのか）ということ把握するのは意外と難しく、また用いられる概念・用語にも抽象度が高く一般的に難解であると思われるものが多い。この授業では、言語学における重要な概念や考え方について、日本語の研究とのつながりを具体的に取り上げながら身に付ける。

授業内容：

- ・日本語と他の言語を比べる(1)
類型論と言語の分類／様々な言語的特徴と傾向
- ・日本語と他の言語を比べる(2)
対照言語学／日本語と中国語／日本語と韓国語
- ・言語学の理論と方法論
生成文法とその影響／コーパスと日本語

評価：レポート

授業形態：講義形式

実施について:授業の実施においても ZOOM による配信に関しても特に問題なく実施できた。
マイクの問題は他の科目と同様。

◆社会言語学：12 単位時間（関崎友愛）

必須の教育内容（50 項目）との対応：

- (8) 社会言語学
- (9) 言語政策とことば
- (10) コミュニケーションストラテジー
- (11) 待遇・敬意表現
- (13) 多言語、多文化主義
- (45) 日本語教育のための語用論的規範
- (48) 社会文化能力
- (49) 対人関係能力

目標:日本語教師として教壇に立つために必要な「社会言語学」の知識や視点を身につける。
また、社会言語学的観点をどのように授業に取り入れることができるかを考える。

授業内容：

- ・社会言語学の視点
ことばの変化／ことばの「ゆれ」／日本語のバリエーション
- ・社会が作り出すことば
差別語／ジェンダー（性差）／役割語
- ・ことばとアイデンティティー
集団語／ウチとソト／方言／ことばの品位

- ・日本語と日本文化
日本語の発想／高コンテキスト文化
- ・日本人のコミュニケーション
あいづち／初対面の会話／話しことばと書きことば／日本人の気配り
- ・社会言語学の理論
「ポライトネス理論」／「協調の原理」／「ポライトネスの原理」
- ・多文化社会と多言語社会
ボーダーレス社会と言語問題／言語サービス／「やさしい日本語」
- ・社会言語学的観点の授業への取り入れ方を考える
会話教材の紹介とその分析

評価：テスト（1 単位時間）

使用教科書：『日本語教育能力検定試験に合格するための社会言語学 10』（アルク）

実施について：授業の実施においても ZOOM による配信に関しても特に問題なく実施できた。マイクの問題は他の科目と同様。教科書として使用した『日本語教育能力検定試験に合格するための社会言語学 10』が絶版となったため、他の教科書を選定する必要がある。市販教材を使用している以上避けられない事態である。しかし、このことによって生じるマイナスの側面以上にメリットがあると考えている。

◆異文化理解・コミュニケーション：12 単位時間（室田真由見）

必須の教育内容（50 項目）との対応：

- （12）言語・非言語行動
- （13）多言語・多文化主義
- （18）異文化受容・適応
- （32）異文化間教育
- （34）コミュニケーション教育
- （50）異文化調整能力

目標：日本語教師に「異文化理解・コミュニケーション」の知識と技能が必要となる理由を考えながら、異文化理解および異文化コミュニケーションの理論について学ぶ。前半は、「文化」をめぐる言説や定義を検討し、異文化接触・異文化受容と言語習得の関係についての諸理論を学ぶ。日本語教育の場面での具体的な事例を想定しながら議論する。後半は、異文化コミュニケーションについて、「コミュニケーション」をめぐる言説や定義の検討、コミュニケーション方略についての理論を学び、日本語教育の実践の文脈で考える。同時に多言語多文化主義や複言語複文化主義、異文化間教育学など幅広く言語や文化と教育をめぐる理念および理論を学び、それが日本語教育の場面でどのように実践に関わっていくのか、具体的な事例に基づいて議論する。講義のみでなく受講者参加型の議論を主体に授業をすすめる。

授業内容：

- ・「文化」とは何か。「文化」の定義、「深層文化」と「表層文化」、日本語教育で「文化」を教えるとはどのようなことか。
- ・自民族中心主義、文化相対主義、異文化理解のために必要な態度、現象学における「エポケー」、異文化間トランス
- ・異文化受容の理論。ベリーの異文化接触の4つのパターン、「同化」と日本語教育
- ・異文化受容トレーニング：具体的なワークとして「カルチャル・アシミレーション」の実践
- ・多言語多文化主義と複言語複文化主義一言語教育政策および言語教育の実践における事例
- ・「コミュニケーション」とは何か。「コミュニケーション」をめぐる理論、様々なコミュニケーション方略とスタイル
- ・言語コミュニケーションと非言語コミュニケーション、パラ言語
- ・異文化コミュニケーションスキル：具体的なワークの実践

評価：レポート

授業形態：講義形式、グループワーク

実施について：東京の教室での実施は問題ない。グループ活動が多い科目なので、東京の教室での活動とサテライト教室での活動が分断されてしまいやすい。

◆言語理解と習得：12 単位時間（大関浩美）

必須の教育内容（50 項目）との対応：

- （14）談話理解
- （15）言語学習
- （16）習得過程（第一言語・第二言語）
- （17）学習ストラテジー
- （18）異文化受容・適応
- （19）日本語の学習・教育の情意的側面
- （29）中間言語分析
- （46）受容、理解能力

目標：外国語習得のメカニズムを明らかにする分野である第二言語習得論の基礎を学び、効果的な日本語教育について考える。また、記憶の仕組みや言語理解の過程について基礎的な事項を学び、日本語教育への応用を考える。

授業内容：

- ・第二言語習得研究とは
- ・中間言語の発達
- ・母語の影響

- ・習得順序
- ・インプット、アウトプット
- ・文法学習の効果
- ・誤りの訂正（フィードバック）
- ・年齢の影響
- ・外国語学習適性
- ・動機付け、性格の影響
- ・記憶のしくみ
- ・言語理解の過程

評価：テスト（1 単位時間）

使用教科書：『日本語を教えるための第二言語習得論入門』大関浩美著（くろしお出版）

授業形態：講義形式

実施について：授業の実施においても ZOOM による配信に関しても特に問題なく実施できた。マイクの問題は他の科目と同様。

◆教授法：12 単位時間（渋谷実希）

必須の教育内容（50 項目）との対応：

- （20）日本語教師の資質・能力
- （24）教授法

目標：様々な外国語教授法を史的変遷に沿って知る。さらに、その特徴や教育効果について学び、将来の自分の日本語教育に生かす。

授業内容：

- ・アイスブレイキング
- ・外国語教授法の変遷と特徴
- ・直接法の体験
- ・教授法を取り入れた実際の授業
- ・様々な学習者や教育現場に合わせた教授法

評価：テスト（1 単位時間）

使用教科書：『日本語教育 よくわかる教授法』小林ミナ（アルク）

授業形態：講義形式、グループワーク、ワークショップ

実施について：グループ活動のサテライト教室との一体感を持つことの困難さは他科目と同様。ZOOM のシステム上での動画、インターネットの使用など複雑な機器の操作が必要のため、機器操作に事前に十分慣れることが必要であると感じた。

◆コースデザイン：12 単位時間（石澤弘子）

必須の教育内容（50 項目）との対応：

（23）コースデザイン

目標：日本語教育におけるコースデザインの方法を学び、効果的かつ実践的な日本語教育の計画ができるようにする。

授業内容：

- ・日本語教育におけるコースデザイン（理論編）
コースデザインとは何か。コースデザインの各段階で実施する「調査・計画・実施・評価」の目的や内容、その方法を学ぶ。
- ・日本語教育におけるコースデザイン（実践編）
コースデザインの事例研究を行う。留学生に対する日本語教育、高度専門人材に対する日本語教育、インターカルト日本語学校における日本語教育など。
最後に首都東京や地域のリソースを生かした 2 週間の日本遊学コースをデザインしてみる。
- ・日本語教育におけるコースデザイン（応用編）
学習ニーズやレディネスの異なるケーススタディから 1 事例を選び、グループでコースデザインを考える。
- ・グループでまとめたコースデザインを発表する。また、その内容について全員で評価する。

評価：課題（発表）

授業形態：講義形式、グループワーク、発表

実施について：講義部分については実施も配信も大きな問題はない。カメラ、マイク等の問題も他科目と同様。サテライト教室で行われる発表を東京教室で共有するにあたり、画質、音声の質をいかに高めるかが課題となる。

◆評価法：12 単位時間（伊東祐郎）

必須の教育内容（50 項目）との対応：

- （6）日本語の試験
- （26）評価法
- （30）授業分析・自己点検能力

目標：評価における言語テストの役割と特徴を考察する。それとともに、日本語教師に求められるテスト作成と評価に関する基礎知識を身につけ、問題項目作成の技術を高めることを目的とする。あわせて、妥当性と信頼性の高いテスト作成のための基本的手順を確認する。

授業内容：

- ・講座概要説明、カリキュラムと言語テスト
- ・大規模テストと小規模テスト：テスト開発とテスト得点分布による考察
- ・テストの特性：信頼性、妥当性、実用性、真正性
- ・言語知識と言語能力—その構成要素を考える：「文法」「文字」「語彙」

- ・演習：「テスト作成」
- ・テスト問題の実際：出題形式や設問方法の検討
- ・言語能力とテスト項目作成の実際：「聴解力」の考察と出題方法
- ・言語能力とテスト項目作成の実際：「読解力」の考察と出題方法
- ・言語能力とテスト項目作成の実際：「口頭表現力」の考察と出題方法
- ・言語能力とテスト項目作成の実際：「文章表現力」の考察と出題方法
- ・テスト項目の精度の検証：項目分析と良問開発
- ・テスト得点の解釈と応用：平均点、標準偏差、標準得点
- ・目標言語使用領域と発問の視点
- ・日本語能力と Can-do statements

評価：テスト（1 単位時間）

使用教科書：『日本語教師のためのテスト作成マニュアル』伊東祐郎著（アルク）

授業形態：講義形式

実施について：東京の教室における授業の実施においても ZOOM による配信に関しても特に問題ない。マイクの問題は他の科目と同様。

◆著作権と教科書・教材 4 単位時間（渡辺唯広・大橋由希）

必須の教育内容（50 項目）との対応：

- （25）教材分析・作成・開発
- （36）著作権

目標：・市販教科書・教材の特徴、製作意図を知り、適切な使い方について考える。
・日本語教育の現場に必要な著作権の知識を得る。

授業内容：

- ・さまざまな市販教材の紹介、その特徴と目的に合わせた使い方を知る。
- ・日本語教育関連教材出版の近年の傾向を知る。
- ・日本語教育の現場に必要な著作権関係の知識の基本的なことを学ぶ。

評価：レポート

授業形態：講義形式

実施について：東京の教室における授業の実施においても ZOOM による配信に関しても特に問題ない。マイクの問題は他の科目と同様。

【実践講座】

教育実習および日本語教育の現場における実践につながる教育内容の科目を実践講座とし、主に 420 時間のコースの後半に設定している。

◆言語教育の基本：8 単位時間（田栗春菜・沼田宏）

必須の教育内容（50 項目）との対応：

- （20）日本語教師の資質・能力
- （21）日本語教育のプログラムの理解と実践
- （22）教室・言語環境の設定

目標：日本語教育を言語教育としてとらえ、一般的に外国語を指導する際に求められる知識、技能とはどのようなものを理解する。

授業内容：

- ・直接法による言語教育の利点・欠点を振り返る。また、直接法による外国語授業を体験することにより、実施するうえで注意すべき点、配慮が必要な点などについて考える。
- ・直接法の日本語教育がどのように展開されるのか、また、授業をするにあたりどのような準備が必要になるのか、など外国語教育としての日本語教育について必要な知識を身につける。

評価：課題

授業形態：講義形式、ワークショップ

実施について：直接法によるヒンディー語授業を受けることによって、学習者にかかる負担の重さを実感することが目的の一つである。実践講座は東京教室とサテライト教室がそれぞれ独立し、それぞれの環境に合わせた内容で行うことを目指しているが、直接法の外国語授を行うことが可能かどうかは講師によるところが大きいため、今後もサテライト教室との合同授業とするのがよいのではないかと考える。少なくとも直接法体験の部分は合同で行うのが現実的であると考えている。

◆日本語教育の実践Ⅰ（初級指導）：60 単位時間（坂本舞・秋山信子・田栗春菜・服部佐智恵）

◆教育実習Ⅰ（初級）：68 単位時間（坂本舞・秋山信子・田栗春菜・服部佐智恵）

必須の教育内容（50 項目）との対応：

- （25）教材分析・作成・開発
- （27）授業計画
- （28）教育実習
- （31）目的・対象別日本語教授法
- （39）日本語教育のための日本語分析
- （47）言語運用能力

目標：日本語教育の基本となる初級学習者に対する日本語指導ができる実践力を身につける。そのために、日本語表現の導入方法を理解し、実践できる力を身につける。また、外国人学習者に対して授業を行うことを通し、困難な点、重要なことが何かを体験的に知る。

授業内容：

- ・初級日本語の授業構成を知る。

- ・初級日本語指導のポイントを知る。
- ・初級日本語の基本 30 項目の分析を行う。
- ・初級授業実践に必要なスキルを知り、身に付ける。
- ・自ら教案を書き、授業を実践する。(模擬実習、対学生実習)
- ・模擬授業は、いくつかの段階を踏んで進んでいく。初めは担当教師が示すモデルをそのまま模倣する段階。その後、自分で考えた導入をやってみる段階に入る。

評価：教案作成、実習

使用教科書：『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ 第2版』(スリーエーネットワーク)

『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ 第2版 翻訳・文法解説』スリーエーネットワーク)

授業形態：講義形式、グループワーク、教壇実習(模擬実習・対学生実習)

実施について：日本語教育の実践Ⅰ(初級指導)と教育実習Ⅰ(初級)は連動する科目として実施している。日本語教育の実践Ⅰの中で指導項目の分析や授業での指導のしかたに関する授業を行い、それを使って教育実習Ⅰの中で模擬実習、対学生実習を行っている。対学生実習は3回。1回目は10分程度で項目の導入のみを行う。2回目3回目ではそれぞれ30分の実習。各実習の前に教案相談を実施。

複数の講師が担当することをプラスと受け止める受講者と、マイナスと感じる受講生が常に存在している。講師による違いを、いろいろなやり方があると理解するか、どれが正解なのか、と考えるかの違いである。実習担当者間では常に入念な打ち合わせをし、授業の引継ぎなども他の授業以上に詳細に行っている。それでも受講生の受け止め方はさまざまであるということである。

◆日本語教育の実践Ⅱ(中上級指導)：26 単位時間(深田みのり・沼田宏)

◆教育実習Ⅱ(中上級)：30 単位時間(深田みのり・沼田宏)

必須の教育内容(50 項目)との対応：

- (25) 教材分析・作成・開発
- (27) 授業計画
- (28) 教育実習
- (31) 目的・対象別日本語教授法
- (39) 日本語教育のための日本語分析
- (47) 言語運用能力

〈語彙〉(日本語教育の実践Ⅱ：8 単位時間／教育実習Ⅱ：18 単位時間)(沼田宏)

目標：中級以降に学ぶ語彙とはどんなものかを知り、その指導法を身につける。

中級の学生に対する授業を体験する。

授業内容：

- ・中級以降に学ぶ語彙と初級語彙との違いを考える。
- ・語彙の意味や使い方の分析のしかたを具体例を通じて考える。

- ・実習課題として割り当てられた語彙の教材を作成する。
- ・中級の学生に対して 20 分程度の授業を行い、その後フィードバックを受ける。

評価：実習

授業形態：講義形式、グループワーク、教壇実習（模擬実習、対学生実習）

実施について：対学生実習前に教案相談を実施。

〈漢字〉（日本語教育の実践Ⅱ：8 単位時間／教育実習Ⅱ：4 単位時間）（深田みのり）

目標：・JSL 学習者（漢字圏・非漢字圏）にとって漢字学習の何が難しいかを考える。

- ・学習者の目的に合わせた漢字授業を作れるようになる。
- ・漢字指導のポイントについて具体的に学ぶ。
- ・モデル学生を対象に漢字実習を体験し、学習者から漢字学習について生の意見を聞く。

授業内容：

- ・JSL 学習者（漢字圏・非漢字圏）にとって漢字学習の何が難しいのか考える／漢字学習（意味がわかる・読める・かける）それぞれの意義について考える／様々な漢字テキストを実際に見てみる。

・漢字授業の実際

- ① 日本語学校の漢字授業を例に、カリキュラムや 1 回の授業の流れを紹介する。
- ② 中級漢字テキストの 1 ページを例に単漢字や熟語の学習ポイント（類似表現、コロケーション、書き言葉か話し言葉か等）を考える。

漢字実習のやり方について説明し、実習デモとワークシートを見せ、担当漢字を決める。

課題：担当漢字の意味や単語について調べておく。

- ・担当漢字や単語について調べたことを発表し、教え方を検討する。

課題：実習で使用するワークシートの作成

- ・モデル学生を相手に漢字実習を行う。終了後、モデル学生からわかりやすかった点、難しかった点などについてフィードバックを受ける。
- ・実習終了後、振り返り。気づいたことや疑問点をシェアし、フィードバックを受ける。

評価：実習（対学生実習）

授業形態：講義形式、ワークショップ、対学生実習（プライベート形式）

〈表現〉（日本語教育の実践Ⅱ：8 単位時間／教育実習Ⅱ：8 単位時間）（深田みのり）

目標：・初級と中級以降の教育内容の違いについて確認し、その中で表現学習の意義を考える。

- ・表現項目を 1 つ例にとり、意味・用法・例文について分析する。
- ・1 人 1 つ表現項目を担当し、用法分析・教案作成。導入～文型提示までを模擬実習する。

授業内容：

- ・初級と中級の違い／カリキュラム・スケジュール・メインテキストの作りを見てみる／表現（文型）とは何か、表現を学ぶ意義を考える。
- ・表現項目を1つ例にとり、項目の意味・文法要件・例文を考え、参考書で調べてみる／練習プリントの例を見て作成ポイントを学ぶ／実習の担当項目を決める。

課題：担当項目の表現分析

- ・担当項目の意味・文法要件・例文・導入方法を検討する

課題：担当項目の実習用教案、練習プリントの作成

- ・担当項目の模擬実習を行い、フィードバックを受ける
- ・表現実習のまとめ／提出した練習プリントのフィードバック

評価：実習

授業形態：講義形式、ゼミ形式、教壇実習（模擬実習）

〈中上級授業見学〉：2 単位時間

目標：日本語学校の中上級クラスの授業を見学することで、実際の授業がどのように進められるのか、学習者とどのように接しているのかなど、現場の様子を知る。

授業内容：

- ・日本語学校の中・上級クラスを見学する。（1 単位時間×2 クラス）
- ・授業のどのような点について見るか、目的を明確にした上で見学に臨む。
- ・授業後に担当教師のフィードバックを受ける。
- ・授業見学シートに記入し、提出。

実施について：担当教師のフィードバックは、授業時間外での実施となるため、教師のスケジュールと受講生の予定をすり合わせる必要があるが、全員の都合を合わせることは困難である。フィードバックの様子を録画し、動画の視聴を義務付けたが、音声の状態を向上させる工夫が必要であると感じた。

この中上級授業見学は、座学では得られない、現場の生の様子が観察できるということで、受講生の評価が高い（修了アンケートによる）。

主なものは以下のとおりである。

- ・もっと見学したかったです。すべての教科での見学があったら良いと思いました。たとえば時間外であったとしても。
- ・実際に授業を見学することで、「日々学んだ知識がどのように効果を発揮するのか、生徒の様子や反応はどうか、先生の指示出しはどうか、板書はどうか」など様々な角度から学ぶことができました。そして、インタラクションのある授業は、見ている側も楽しめるということがわかりました。学生が主体となり、発言を拾って授業を作り上げていくための先生方の意識と工夫を感じる授業でした。

- ・中級の授業見学は2時間だけでしたが、とても貴重な時間でした。先生方からのフィードバックでさらにいろいろ勉強になりました。2時間×2回だったらよかったのに…、とつくづく思います。
- ・中級の授業の進め方、どうやって発話させるか、学生の様子（反応）を見学することができてとても参考になりました。
- ・授業の雰囲気や講師の手法がわかり、大変良かった。

事前に目的を明確にした上で授業見学に臨んだこと、授業見学シートによって見学することの意識づけができていたことが、意義のある授業見学になったのではないかと思う。

◆日本語教育の実践Ⅲ（技能別指導法）：18 単位時間（深田みのり・沼田宏）

必須の教育内容（50 項目）との対応：

- （3）多文化共生（地域社会における共生）
- （6）日本語の試験
- （39）日本語教育のための日本語分析

〈書く〉：4 単位時間（深田みのり）

目標：・日本の学校教育で行われる作文と JSL 学習者に必要な作文技能の違いを知る。

- ・目的を明確にした作文授業が行えるようになる。
- ・添削や評価の意義、方法について考える。
- ・学習者の「書く」技能向上だけでなく、深い考察や表出の喜びを感じられるような授業づくりについて考える。

授業内容：

- ・日本の学校教育での作文と日本語教育に求められる作文の違い／作文授業は何のためにあるか／「書く」形式のいろいろ（パソコン、タッチパネル、履歴書や書状等）／原稿用紙の表記ルール
- ・作文授業の実際と教師の役割 ①書く前 ②書いている時 ③書いた後／作文の評価について／さまざまな作文授業の試みの紹介

授業形式：講義形式

〈やさしい日本語〉：4 単位時間（深田みのり）

目標：・JSL 学習者の目線で日本語を捉え直し、彼らにとって日本語の何が難しいのかを知る。

- ・JSL 学習者にとってわかりやすい日本語の使い方を習得し、円滑で学習者に配慮のあるコミュニケーションができるようになる。
- ・身の回りの社会が外国人にとって暮らしやすいか、多文化共生の方向に向いているかを考える意識を持つ。

授業内容：

- ・滞日外国人事情／外国人からみた日本語（外国人にとって日本語の難しい点は何か）／やさしい日本語とは／やさしい日本語のあゆみ／やさしい日本語の基本ポイント
- ・やさしい日本語への言い換え練習・書き換え練習

授業形式：講義形式、グループワーク、発表

実施について：生活の中で外国人にとってわかりにくいと思われる表示の例を探してくる課題を実施。

〈読解指導〉：4 単位時間（沼田宏）

目標：・目的に合った読み方をいかに指導するかを考える。

- ・学習者にとって何が難しいのかを知る。

授業内容：

- ・「読む力」とはどのようなものか
- ・読むことによる文章理解の過程を知る。
- ・さまざまな読解行動（どのような目的で「読む」のか）について考える。
- ・読解のスキルについて
- ・読解のストラテジーについて
- ・「読む力」を伸ばすためにどのような練習をしたらよいか
- ・読解教材の作成意図について考える

使用教科書：『読むことを教える』国際交流基金 日本語教授法シリーズ7（ひつじ書房）

授業形態：講義形式

実施について：読解教材を「語彙」や「表現」を取り出す畑と考えるのではなく、まとまった文章の内容を読み取る授業について考察した。どのようなタイプの文章を読む場合に、どのようなストラテジーが生かせるのかを考えた。

〈聴解指導〉：4 単位時間（沼田宏）

目標：日常生活の中でどのような聴解行動をとっているかを知り、それぞれの場面でどのような聞き方が必要であるかを考え、その指導法を知る。

授業内容：

- ・日常の聴解行動について考える。
- ・聞くことによる理解の過程を知る。（聴解過程のモデル）
- ・聞き取るために必要なスキルについて知る。
- ・聴解のストラテジーを知り、どのような練習方法があるかを知る。

使用教科書：『聞くことを教える』国際交流基金 日本語教授法シリーズ5（ひつじ書房）

授業形態：講義形式

〈発話指導〉：2 単位時間（沼田宏）

目標：「話す」という行為について考え、その能力を伸ばすためにどのような練習をしたらよいかを知る。

授業内容：

- ・「話す」行為のプロセスを知る。
- ・話す力とはどのようなものかを考える。
- ・話す力を伸ばすためにどのような練習をしたらよいかを知る。
- ・リピーティング、シャドーイング、ディクテーション、ディクトグロス等についての知識を得る。

授業形態：講義形式

◆ICT／電子教材の使い方・作り方：6 単位時間（都築鉄平・矢口奈保子）

必須の教育内容（50 項目）との対応：

（35）日本語教育と ICT

目標：・日本語教育への ICT の有効活用のしかたを考える。

- ・授業に活用できる電子教材を作成し、使い方を考える。
- ・機器に触れることで ICT 教材に慣れ、抵抗感をなくす。

授業内容：

- ・従来の紙の教材を電子教材に置き換えることで何が可能になるかを考える。
- ・電子教材と紙の教材のそれぞれの特徴を考える。
- ・電子教材作成アプリ『Finger Board』を使用し、自作の教材を作成し、発表する。

評価：課題（教材作成と発表）

授業形態：ワークショップ形式

実施について：電子教材作成アプリ『Finger Board』を使った教材作成は、機器の使用に関するリテラシーの差が大きく、人によっては重い課題と覚えることもあったようだ。このような特別なアプリを使うだけでなく、インターネットを活用した学習のしかたや、日本語学習に有益なサイトやアプリの活用法などを取り上げることも必要であろうと感じた。

◆パフォーマンス基礎：6 単位時間（春風亭小柳・大迫ゆかり）

必須の教育内容（50 項目）との対応：必須項目外

〈落語に学ぶ日本語教育〉：2 単位時間（春風亭小柳）

* 必須項目外

目標：いかにして意思を伝えるか、その手段として「言語」「非言語」をどのように活用できるかを考えると、話芸としての落語のパフォーマンスから得られるものは多い。人に伝える話し方、言葉を使わないコミュニケーションの方法を落語から学ぶ。

授業内容：

- ・聞き手を引き付ける話し方について考える。
- ・非言語コミュニケーションのテクニックを知る。
- ・提示された課題についての発表

〈ボイストレーニング〉：4 単位時間（大迫ゆかり）

目標：聞きやすい話し方、声の出し方について学び、実践につなげる。発声前の緊張をほぐす方法の理解、腹式呼吸の確認・横隔膜の使い方の練習、発声時の姿勢、ブレスのしかた、唇の鍛え方、滑舌など、授業に役立つ発声法と話し方をプロのアナウンサーに学ぶ。

授業内容：

- ・発声法の指導と実践
- ・口の開け方の指導と実践
- ・腹式呼吸の練習方法の紹介
- ・声を出す前のリラクセス法 など

6-4. 評価について

すべての科目を、テスト、レポート、課題で評価しなければならず、受講生にとってはこれらをこなすのは非常に大変であることが、日々の感想や修了アンケートなどから見て取れる。一つ一つの負担を軽減するために各講師にテストの内容の変更を依頼することもあるが、「評価」が目的である以上、評価することが可能な内容を持ったテストでなければ意味がなく、かといって再テスト者が続出するようなテストは望ましくない。「テストができないのは、授業に問題があるから」ということも言われるが、スケジュール上、立て続けに複数科目のテストが行われる（行わなければスケジュールからはみ出してしまう）という現状にどう折り合いをつけるかは、今後も課題になるだろう。

6-5. その他の活動の実施状況

日本語教師養成講座は職業訓練の意味合いが強く、実際に受講を希望する人の 9 割以上は修了後に何らかの形で日本語教育に携わる仕事をしたいという希望を持っている。その意味で、就職ガイダンスの実施は重要な意味を持つ。当機関の 420 時間コースは、標準的には 6 カ月で修了することになっている。その 4 か月目の前半に全体（参加希望者のみ）に向けてのガイダンスを実施する。主に、日本語学校での働き方の話が中心になるが、国内のそれ以外の働き方や海外での就職状況についての説明もする。1 時間程度で実施し、以降は個別の就職相談になる。

当機関では 9 割以上の修了生が就職を実現させている。

6-6. 実施にあたってのオンラインの状況

2018 年 10 月期に、オンラインを意識した授業形態で研修を実施した。設備は ZOOM 用の PC が 1 台、ZOOM で共有する資料（スライドなど）を映写するモニター（大型テレビ）、Web カメラ 1 台、講師の声を拾うピンマイク 1 つ、受講生の声を拾うハンドマイク 1 台で、開始した。

講師が教卓を離れない状態であれば問題ないが、動きがあるとカメラの範囲から出てしまい、ホワイトボードのみが映っている状態になる。講義形式の授業を行う講師に対しては、動き回らないよう要請し、グループワークや動きのある活動が授業の中に入る場合は、途中で講師がカメラの向きを変える必要がある。

音声は通常は問題ないが、①ネット環境次第で、音声が乱れることがある。また、②原因不明の金属音やハウリングが起きて聞きにくくなることもあった。最も注意すべきは、③受講者がマイクなしで質問してしまうことがあり、そのような場合、録画された動画上は講師の回答のみが録音されており、どのような質問だったのかは推測するしかないという状況が発生した。

このマイクを回すという作業は、受講生の慣れによって回し忘れるという事態はかなり改善されたが、どうしても時間的なロスが生じることと、授業に没頭しているときほど忘れやすいという問題点は解決されなかった。

2019 年 4 月期には、パイロット版として久留米サテライトへの配信を行った。受講生はなしで、教職員が視聴するという形で実施し、フィードバックを繰り返した。そこでの問題点は予想通り、①金属音のような雑音、ハウリングなどの音声トラブル、②マイクの回し忘れが問題、ということであった。

講師の姿が画面から消えたり、グループワークの様子が見えないという問題も継続していたが、Web カメラの限界と考えるしかなかった。

しかし、2019 年 10 月期には福島サテライトに受講生を迎えての開講が決まっており、現状維持というわけにはいかなかった。

このようなオンライン配信を続けていき、問題点を解決しなければならない状況に追い込まれると、当初得ることのできなかった様々な情報が入手できるようになり、改善の糸口が見えてきた。

機器の扱いに慣れるにつれて、トラブルの回数は確実に減少するものの、音質、雑音の改善は思うように進まず、東京教室の様子をいかにしてサテライトに伝えるかという課題も機器の慣れだけでは如何ともしがたく、質の向上を図るためにはより上位機種への更新が不可欠であることを悟った。

福島サテライトへの配信のシステムとして、学生の声拾うのに使用していたハンドマイクを集音マイクに切り替え、マイクを回すことなしに教室全体の声を拾えるようになった。集音マイクの実験で、当初は 1 台であったが、声を拾う範囲が狭すぎたため、2 台にす

ることで実用化できるようになった。

また、グループワーク時の教室様子も配信できるように、Web カメラをやめ、カメラの性能を高めた。これまでは Web カメラを講師の目の前に置いていたが、それをやめ、高性能のカメラを教室の後ろに置くことにした。

通常はズームで講師を大きく映し、教室全体の様子を映したいときにはカメラを引いて広角でとらえることができる。また、その操作が教室外からできるということもあり、利便性が大きく向上した。

7. 事業全体の評価

7-1. 検討方法

評価・検討委員会を組織した上で、以下のように評価、検討を行う。

1) 養成講座受講者による評価

(1) 受講者アンケートによる評価：養成講座受講後に受講者アンケートを実施し、講座内容、教材、講師、実施形態、また講座全体の満足度等についての評価を行う。

2) 当機関による評価

(1) 講座内容に関する自己評価：当機関内で、講座内容、教材、実施形態等についての評価を行う。

(2) 受講者の受講状況に関する評価：受講者の講義、実習、課題等への取り組みや成果を通して講座の評価を行う。

(3) 受講者の就業状況に関する評価：養成講座修了後の就業状況から、講座の評価を行う。
実際の評価の過程

3) 評価・検討委員会による評価

上記 1. 2. を踏まえて評価・検討委員会を実施し講座全体の評価を行い、評価内容及び改善点を整理した上で次期講座実施案を策定する。

7-2. 検討結果

本事業の目的である、「国内外で増加かつ多様化する日本語を必要とする者に対する日本語指導を行うための基礎となる知識・技能・態度を身につけ、それぞれの教育現場で定められた日本語教育プログラムに基づいた日本語教育を行うことのできる人材を養成するプログラムの開発を行い、さまざまな活動分野での日本語教育を志す者に提供すること」について以下の 2 点を行うことを確認した。

①日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版」に示された「日本語教師【養成】における教育内容」の中の「必須の教育内容」を満たし、かつ、知識に偏重することなく実践力を身につけた日本語教師を養成するために十分な実習を盛り込んだプログラムを開発し、提供する。

②対面授業とオンラインビデオチャットツール「ZOOM」を活用したオンライン授業を併用することで、課程の全時間を通学することが困難な者にも受講の機会を提供できるようにすること。

上記①について、「必須の教育内容」を満たす内容の講座であるということは「1. 教育課程の検討」に記したとおりである。知識に偏重することなく実践力を身につけた日本語教師を養成するために十分な実習を盛り込んだプログラムというのは、「報告書」p.24 の日本

語教師【養成】に求められる資質・能力の内容に合致しているかどうかということになると思う。

「知識」に該当する部分では、【1. 言語や文化に関する知識】【2. 日本語の教授に関する知識】【3. 日本語教育の背景をなす事項に関する知識】は、当機関養成講座の理論講座とまさに合致する内容となっている。

また、「技能」に該当する【1. 教育実践のための技能】【2. 学習者の学ぶ力を促進する技能】は、実践講座で身につけるべき到達目標と合っていることがわかる。

養成講座の教育内容によって身につけることが可能なのはこの2つの分野についてであるだろう。「態度」そのものを教育課程に組み込むことはできないが、日々接する講師の日本語教育や授業などに対する姿勢・態度を通じて、授業内容以外のことを学び、吸収していることも多いと。修了アンケート等を通じて感じとることができる。

上記②については、ZOOM の活用だけでなく、NTT 東日本の情報共有ツール ひかりクラウド・スマートスタディを使用することにより、遠隔地での受講に加え、東京教室に通学する受講生にとっても、授業の復習や欠席時の補習が可能になり、利便性が大きく高まった。

2018 年度の事業評価委員会で、ZOOM にこだわらないほうがいいのか。今は大学等でさまざまなオンラインシステムを活用しているので、よりよいものが見つかる可能性もあるとの助言をいただいた。

結果としては、ZOOM はそのまま使用し、そこに NTT 東日本のひかりクラウド・スマートスタディを組み合わせる形でうまくいっている。

現在は、通学コース（東京教室）と福島サテライト教室のみで使用しているため、出席確認や受講管理のためのツールとしては活用していないが、今後、通学以外のコースを開設する場合には、このシステムが力を発揮することが期待できる。

2019 年 4 月期はすべての内容を予定通り実施、10 月期のコースでは、2020 年 3 月に予定されていた中上級レベルの対学生実習を、新型コロナウイルス感染症への対応のため、自主的に受講生間での模擬実習に変更したが、それ以外の初級実習における 3 回の対学生実習は予定通りに実施でき、必要回数は確保できたものとする。しかし、この状況によって通学が不可能になり在宅での受講を希望する人が出てきたことにも対応することでできた。

今後も様々な事態に対応するためのツールとなりうるのではないかと思う。

受講者アンケートからは、概ね高い満足度を得られていることが窺われるが、ZOOM 使用によるマイクの問題など、不満があることも現れている。ハンドマイクから集音マイクへと設備の更新を行っているが、品質向上のために、さらに受講生の声を拾っていく必要がある。また、アンケート結果の数量化も今後の課題であるが、現状では母数が少ないため数値が意味をもたないと言わざるを得ない。今は、受講者アンケートで寄せられた修了生からの

声を丹念に拾い、現行コースの改善や今後の新コースの企画等に生かしていくことが大切であると考えます。

教材開発では、初級・中上級それぞれの指導に有効な教材の作成を目指した。初級では項目導入のしかたの参考となるサンプル動画を作成。中上級では、指導ポイントのおさえ方を理解するための教材を作成した。初級レベルの導入はある程度パターン化できるため動画が有効であるが、中上級では項目そのものも、指導のしかたも多様であるため、具体例よりも考え方を示す方が有効であろうと考えた結果である。

サテライト教室を実施するにあたり、コーディネーターの存在が重要なポイントとなっている。特に実践講座では東京の教室とサテライト教室ではそれぞれが独立して教育実習を行う、ということになっているためである。福島サテライトのコーディネーターは当機関の養成講座の修了生であり、実習をはじめ、言語教育に関する基本的な考え方が本校での担当者と共通していたことがサテライト教室の運営をスムーズにしていたと言えよう。今後、様々な地域に存在すると思われる通学困難な者に対する受講の機会を拡大していくために、サテライト教室の増加を考えていく必要があるが、その際のコーディネーターとしての役割を果たす人材の育成、リクルートも重要な課題となっていくと考えられる。

7-3. 修了生アンケートのまとめ

A：理論講座全般について

(1) 良かった点、役に立った点

- ・講師陣の専門性ゆえの豊かな内容が素晴らしかったです。
- ・経験・知識が豊富で、親切な先生方の講義を受けさせていただき、多くのことを学ばせていただきました。実際の現場のお話を聞きながら、学べたことで、より理解が深まりましたし、「こんな感じかな～」と想像しながら学ぶことができました。振り返ると、幅広い分野の理論講座がありましたが、毎回のテストがあったことで、検定対策講座をしている今でも、割と鮮明に記憶を保持することができていると日々感じております。質問にも快く受けてくださったことが印象に残っています。
- ・素晴らしい講師陣、大学でも教鞭をとられているような先生方から、質の高い講義を受けることができたことが本当に良かったです。また、どの先生からも日本語教育への情熱、良い教師を育成したいという情熱が伝わってきて、日本語教師になるモチベーションが日々高まりました。
- ・講師の先生方が、皆、素晴らしい方々ばかりだと思いました。
- ・インターカルトの先生方を始め、日本語教育を長くけん引していらした方々や、第一線で活躍されている方々の第一級の講義を受けられたと思っています。日本語教育の歴史、課題、理想など、熱いメッセージをたくさんいただきました。

- ・講師陣が素晴らしく、色々な知識を得られたことは、大変良かった。他校の養成講座に比べ、充実しているという話も聞いており、受講料に見合った内容である。
- ・教科者だけを使用するのはなく、わかりやすくまとめた資料を基に教えていただいた科目が多かったので理解しやすかったです。特に文法の資料は、実習の教案作りでもよく参考にさせていただきました。実際に学生に教えるようになって絶対役に立つ「教師のための参考書」になると思います。また、いわゆる知識だけでなく、第一線で活躍されている先生方から日本語教育を取り巻く状況についても教えていただいたことは、今後の日本語教師の在り方について再考するよい機会となりました。
- ・講義中心の期間中に、パフォーマンス、ボイストレーニング、ICT 教材といったアクセントをつけたユニークな講義がちりばめられていたのが良かったです。
- ・日本語教育能力試験にも役立つようにという配慮もしてくださり、感謝しています。
- ・検定を意識し、検定を網羅した内容にしてほしいという、他の意見を耳にしたことがあるが、私は反対である。検定対策と理論は、勉強のあり方が全く別物であり、学際的な内容の方が、今後自分のベースとなる日本語教師としての知識や考え方を養うことができる。養成コースは、今後も日本語教師としての個人の素質を養う場であってほしい。

（2）改善してほしい点

- ・「語彙」の授業は最高に楽しかったのですが、扱う範囲が広すぎてポイントがつかめませんでした。また、試験時間内で回答を記述するには問題が多すぎだと思いました。
- ・要望になってしまいますが、「著作権」は何がだめで、どこまでがグレーゾーンなのか、許容範囲が今一つ把握できていないので、実際に授業を行うことを仮定し、授業準備として実際に考えてみたかったというのがあります。
- ・「改善」ということではないですが、6 カ月コースでは時間不足なのでしょうね。それぞれの先生方の講義を、倍の時間ぐらいかけても受けたかったという気がしています。科目ごとの試験の日程もかなり厳しかったです。やはり6 カ月コースでは致し方なかったということだと思いますが…。
- ・「語彙」のテストは、他のテストに比べ、試験時間がタイトであった。問題量の再考、記述問題の選択式への変更、また、それが叶わないのであれば、選択、穴埋め問題を最初にもってきて頂きたい。内容は、講義内容の肝要な部分を受講生が理解しているか、推し量ろうとする講師の意気込みが感じられ、大変良かった。
- ・マイクの取り扱いについて、受講者が質問する際、失念することが多く、より良い方法はないか、模索していただきたい。良い講義であればあるほど、受講者は、集中しており、失念することが多くなるのは当然である。また、他者が気づき、使用を促す形になっても、質問を遮るのが憚られ、遠慮してしまうこともある。受講者の協力だけでのマイクの運用には、限界がある。例えば、スイッチ式でオンオフ可能なスタンドマイクを各自の席に備えるのはどうだろうか。採算の面もあると思うが、検討していただきたい。

B：初級実習について

（1）良かった点、役に立った点（項目分析、演習内容、対学生実習など何でも）

- ・学生を追い込んで文型を導入する教案の作り方はとても役に立ちました。項目分析で文型の見方を学び、導入文を考え、その導入提示のための状況を設定する、とても良い流れで教案作成の仕方を学びました。
- ・最初のころは実際に授業を見たことがなく、想像できなかつたため、アイデアも、どう構成すべきかも考えるのが難しかったです。でも、先生方がデモンストレーションをしてくださったおかげで、少しずつ流れやポイントをつかんでいけたと思います。後半では、まず自分たちで考えてきたものをクラスで発表し、最後に先生方の例を示してくださいましたが、その流れも自分のためになったと感じております。実習に関しては、すべてのチェック項目を完璧にしようとせず、毎回の実習で「これだけは！」というものを自分で決めて、それを前回よりも良いものにするようにしてください。という先生からのお言葉が今でも印象に残っています。とても心が軽くなり、（大変でしたが）実習を楽しむことができました。また、ビデオでその日の振り返りができるシステムは本当にありがたかったです。
- ・項目分析、演習等、最初は訳も分からずやっていた感がありましたが、少しずつやることが結びついてきたように思います。
- ・坂本先生、秋山先生、田栗先生には本当にお世話になりました。どの先生方も、なぜここまで親身になって私たちのことを考えてくださるのか、と思うほどでした。日本語教師に必要なことは全部教えるから、ちゃんと理解して身につけて、というような熱意を先生方に感じました。それぞれの先生にそれぞれの個性や表現のしかたがあり、例えば「コース」の声掛けひとつでもそれぞれで、とても勉強になりました。たくさん真似をさせてもらっています。
- ・複数の先生による実習指導は、それぞれの先生のやり方の中から、自分に合った指導法を自分なりに見つけていくことができる点で、とてもよかったです。
- ・対学生実習に来てくださった学生の皆さんには、とても感謝しています。実習は準備も大変でしたが、何より実習当日の緊張感は半端ないものでした。が、それを乗り越えてこられたのは、温かく楽しく付き合ってくださいました学生の皆さんのおかげだと思っています。
- ・実習ごとのフィードバックは、大変貴重なものでした。実習ごとにどん底まで落ち込みましたが、フィードバックでいただいた様々な言葉を反芻し、そのたびに次につなげるものを少しずつつかんできたように思います。まだまだわからないことがたくさんあり、現場に出られるのだろうか、と誤ってしまいますが、きっとここからは、現場で自分が切り拓いていくものなんだろうと思います。
- ・項目分析をしっかりとやっていただいたので、その重要性がよくわかりました。
- ・講師の布陣が充実していたためか、各項目の説明は分かりやすく、大変身になった。特に、

- 対学生実習を通し、現場の雰囲気を生で感じる事が出来たのは、大変良かった。また、教案作成においても、親身になって、教案の手直しを助けてくれたことは、大変良かった。
- ・フィードバックをもらえることは、講師、受講者の分含め、大変良かった。

（2）改善点

- ・インターカルト独自の導入スタイルを学べたのは素晴らしいのですが、「みんなの日本語」を使うのであれば、教科書に沿った方法もできれば教えていただきたいかった。特に、「導入、ドリル、チェック、練習、活動」を一連の流れとして通してやってみるか、そのすべてを一度見学させてもらえたら良いと思いました。
- ・スケジュールの関係でということは重々承知なのですが、1週間毎日初級実習だと、脳が働かない状態になることがありました。合間合間に理論が入ったりすると、気持ちと頭の整理ができるかな。と思います。あとは実習当日の朝、教室の変更があったりして、先生方も私たちがバタバタしたまま実習に入るケースが多かったので、落ち着いた状態で実習がスタートできるとより良いな。と思います。
- ・初級実習の終盤になって、少しずつ授業の全体像が見えてきましたが、初めは、今やっていることが全体にどう関わってくるのかということがわかりませんでした。私の理解力がなかったか、敢えてそのような組み立てだったのか、時間の問題なのか。最終的にはきちんと教えていただいているので、それで良かったかもしれませんが。
- ・項目分析と導入シートを別葉にした方がいいのではないか。導入の記述欄が、回を進める毎に手狭であると感じた。最初の5回ぐらいの講師陣の導入例の提示の際は、従来の項目分析シートでも良いと感じるが、初回からある程度過ぎたところから、教案シートに拠り沿った形の導入シートの作成をさせることは、教案作成の良き演練にもなり、効果があると思う。また、蓄積にも役立つと考える。

C：中上級実習について

（1）良かった点、役に立った点（授業内容、対学生実習など何でも）

- ・それぞれの項目での実習、とても勉強になりました。漢字に関しては、漢字圏、非漢字圏と分けて実習できたのは良かったです。表現では、分析するためのリサーチの大切さを学びました。語彙の対学生実習は、すごく楽しかったです。
- ・次から次へと課題ややるが増え、本当に大変でしたが、実際に授業見学をさせていただいたことで、そのあとの講義や実習が進めやすかったです。いろいろな種類の教材や参考書を見ることができたのも、勉強になりました。教えるのではなく、ともに学ぶ姿勢を学びました。
- ・初級実習の後だったことと思いますが、短時間の授業でしたがとても勉強になりました。中上級という段階は、私の中ではまだまだ曖昧模糊としていますが、読む・聞く・書く…それぞれに教えていただいたことはとても面白かったです。（それぞれの分野を10

倍ぐらい時間をかけて教えていただいたかったです。）

- ・模擬実習、対学生実習はとても勉強になりました。沼田先生と深田先生のフィードバックは、角度や言葉は違いましたが、同じ指摘をいただいた気がしました。今回はいつも以上に地獄の底まで落ち込みましたが、先生方の言葉をいつものように反芻しているうちに、自分の根本的な課題がひとつ見えてきて、また這い上がってきました。
- ・深田先生にも本当にお世話になりました。授業内容はもちろんですが、深田先生という方そのものからたくさんのお話を学ばせていただいた気がします。もっとたくさん授業を受けたかったです。
- ・教案やワークシート等をメールで提出することが可能だったので、先生に直接メールでわからないところを確認することができてとてもよかったです。また教案相談は1人ずつ行っていたので、疑問を残すことなく実習に臨むことができました。
- ・技能別指導は、短い時間でも重要なポイントをしっかりと教えていただいたのでとてもよかったです。今後中上級の学生を教えることがあれば、たいへん役に立つと思います。
- ・初級実習と同じく、大変身になり、今後の自信につながる実習構成であった。また、講師の意図をよく汲み取れないことに関し、コミュニケーション力を今後ともよく養っていかないといけないという自分の課題もよく分かった。

（2）改善点（授業内容、対学生実習など何でも）

- ・時間が許すのであれば、もっともっと中上級の授業を受けたかったです。初級と中上級ではまた違った難しさがあるので、もっと知りたい！もっと勉強したい！という気持ちになりました。非漢字圏と漢字圏の学生に実習ができたことはそれぞれの特徴をつかみやすく、とてもありがたかったです。
- ・模擬実習、対学生実習の日程が入り組んでいてわかりづらかったです。短期間のうちに盛りだくさんの内容なので、致し方なかったのかもしれませんが、頭がこんがらがりました…。
- ・語彙、表現、漢字の実習の日程がタイトで、体力的にも精神的にもとてもきつかったです。提出物の数なども含め、再考いただければと思います。

（3）授業見学の感想

- ・もっと見学したかったです。すべての教科での見学があったら良いと思いました。たとえ時間外であったとしても。
- ・実際に授業を見学することで、「日々学んだ知識がどのように効果を発揮するのか、生徒の様子や反応はどうか、先生の指示出しはどうか、板書はどうか」など様々な角度から学ぶことができました。そして、インタラクションのある授業は、みている側も楽しめるということがわかりました。学生が主体となり、発言を拾って授業を作り上げていくための

先生方の意識と工夫を感じる授業でした。

- ・中級の授業見学は2時間だけでしたが、とても貴重な時間でした。先生方からのフィードバックでさらにいろいろ勉強になりました。2時間×2回だったらよかったのに…、とつくづく思います。初級クラスの授業見学もしたかった、とも思っています。
- ・中級の授業の進め方、どうやって発話させるか、学生の様子（反応）を見学することができてとても参考になりました。

D：就職サポートについて

(1) 良かった点、悪かった点、改善点をお書きください。

- ・親身になってくださって感謝しています。
- ・お忙しい中、個別で相談に乗っていただいたり、講座修了生の先輩方の就職記録を見ることができたので、とても参考になりましたし、助かりました。就職活動が始まるタイミングなど、全く把握しておらず、ガイダンスに参加したときは「もう手遅れ?!」と焦りましたが、みなさまのサポートのおかげで無事に就職先を見つけることができました。海外の提携校と繋いでいただいて、実際に授業見学できたことにも感謝しております。
- ・説明会をしていただいたおかげで、概要がみえました。また、情報も役に立ちました。私自身がのんびりしていましたが、谷口さんには気にかけていただいて感謝しています。
- ・谷口さんにサポートしていただいたおかげで無事に就職することができました。本当にありがとうございました。また就職ガイダンスもとても役に立ちました。ただ、もう少し早く実施していただければその後の就活がもっとスムーズになるかも…と思いました。
- ・大変良かった。紹介してくれたこと、就職できたことに事務局の人々に感謝している。また、インターカルトや桜日語学院の就職試験も受けれて、落ちたものの、大変良かったと感じている。この2校を受けたことは、JPTIP 受験にあたり、緊張の緩和や自分の前職等も考慮した面接対応等を再考する大きなきっかけとなった。

(2) 修了後のサポートで望むこと。また、個人的にお願いしたいこと。

- ・まだ何も決まっていませんが、1月に向けては仕事をしたいと思っています。もしかしたらいろいろご相談させていただくかもしれませんが、その時は、よろしく願いいたします。
- ・具体的なことは今すぐに思いつかないのですが、出身校としてずっと繋がりを持っていたいと思っています。
- ・2年間台湾での勤務を終えたのち、そのままか、日本に戻るかはわからないが、ベトナムに行きたいという気持ちもある。その際は、また、相談させていただきたい。

(3) 就職先が決まっている方は、学校名を教えてください。

（省略）

E：修了しての感想

- ・私は「名前を覚えてもらえる（挙げてもらえる）日本語教師になれ」という加藤校長の言葉がとても印象的で最終的にインターカルトを選びました。受講中の大半は具体的な教師像を考える余裕も時間もなく慌ただしい日々が過ぎていきましたが、修了れ近づくにつれ、日本語教師としての就職先も決まるなど現実味が増す中で、もう一度この加藤校長の言葉の意味を考えるようになりました。知識を得ること、学習者を見る目を養うこと、的確な技（絶妙なタイミングで使いどころを提示する技）で質の高い日本語教育・支援が提供できること、それらが学生に慕われる大きな要素かなと思います。どんな仕事でも求められるものだと思いますが、日本語教育・支援の中でこれらが高めることを目標として、結果的に加藤校長の言われる個人名を覚えてもらえるような教師になれるよう励んでいきたいと思っています。そのような道筋を教えてくれたインターカルトに感謝しています。

これからますますダイバーシティー、インクルーシブが叫ばれる社会になっていくと思います。進学を目指す、就職を目指すインターカルトの学生が関わる将来の社会や会社では、もしかしたらダイバーシティー・インクルーシブが当たり前かもしれません。日本語・日本社会への玄関口であるすべての教師の方々に多様性&インクルーシブの感覚を持っていただきたいと思いました。個人の価値観、教師が思う日本の価値観など、様々あると思いますが、言葉の変化に敏感なように社会の変化、国際社会の潮流にも敏感であってほしいと思います。欲を言えば、LGBQ に対してフレンドリーな学校として日本語学習者の間で名前が知れ渡る学校になってほしいと思いました。

養成講座はあっという間の半年でした。今の私たちは、養殖所で育った稚魚です。これから川に放流されます。しばらくすると海に流れ着くのでしょうか。広い海です、あっちに流され、こっちに流され。流されつつも学習者目線を忘れず、的確な学習支援のできる教師になっていきたいと思います。

- ・こうして振り返ると、あっという間の半年間でした。理論講座があった数か月は、放課後にその日に習ったことを復習していましたが、今思えば、まだ時間に余裕があったと思うので、時間をうまく利用して検定試験の勉強をしておけば良かった…と反省しております。初級実習が始まってからは、余裕がない日々が続き、自信を失ったりもしましたが、クラスのみなさんと、先生方のおかげでなんとか乗り越えられたと思います。中級もまた違う難しさがあり、初日にインターカルトの先生方が口をそろえて「大変だと思いますが…」と言っていたことを思い出しました。でも、初級とはまた違った角度から日本語・日本語教育について考えることができました。養成講座を受けるまで、ます形・ない形なども知らず、さらには母国である日本語についての知識もなく、「こんなんでもこの先大丈夫だろうか」と不安になりましたが、半年間で日本語の難しさも楽しさも学びました。どの

仕事もそうですが、日本語教師は一生勉強できる仕事だということを、日々感じております。半年間、本当にお世話になりました。この場をお借りして、心から感謝申し上げます。そしてこの先もどうぞよろしく願いいたします。

- ・とてもハードな6カ月間でしたが、インターカルトで学ぶことができ本当に良かったと思いました。初めに谷口さんにお会いしたことが、インターカルトに入学する決め手だったので、谷口さんには本当に感謝です。入学後も、大変お世話になりっぱなしで、どうもありがとうございました。
- ・日本語学校と日本語教師養成の二本立ては大変なことなんだろうな、と思いました。また、それが一つの理念のもとに行われているように思い、すごいことだと思いました。
- ・スピーチ大会にも参加させて戴けて、感謝しています。母国を離れて、難しい日本語にチャレンジしている学生の皆さんたちは、いくつもの困難を乗り越えてきているためか、とても輝いていました。スピーチの内容が大会を始めたころより格段に深まっているというお話も伺いましたが、インターカルトが進化し続けているということだと、理解しました。
- ・また、6カ月間苦楽を共にした素敵な「学友」を得ることができました。それも、そのような状況を作ってくださったおかげだと思っています。先生方、スタッフの皆様、本当にどうもありがとうございました。
- ・すばらしい先生方、事務局のスタッフのみなさま、やさしくて頼もしいクラスメートに出会うことができインターカルトを選んで本当によかったです。テストや課題も多く、最初は続けられるか不安でしたが、みなさまのおかげで無事修了日を迎えることができました。この出会いは一生の宝ものです。
- ・得られたこと 孤独から脱出出来たこと。
将来の展望がちょっと見えたこと。
人間不信が改善したこと。
日本語教えることって、難しいし、面白いと思ったこと。
出会いが増えたこと。
人生の充実感を取り戻したこと。どうもありがとうございました！
- ・子供の小学校が休校になって授業に参加ができなくなった際に、ZOOMでのオンライン受講ができた点が本当に助かりました。理論をオンラインでも受講できる養成講座は他にも多数ありますが、ZOOMで自宅からリアルタイム視聴し、先生の指示で発表したり、と参加までできるのはインターカルトだけでは？ 先生が福島とのやりとりで慣れているから、ということもありますが、すごいと思います。子供の学童へ通う日処がたったので2日間だけのZOOMを使った受講でしたが、とてもいい経験をさせていただきました。

8. 成果と課題

本事業を終えて、今一度事業全体についての成果を振り返り、今後の課題を考えることにする。

各分野の第一線で活躍される講師陣による理論講座は当機関の大きな特徴であるといえる。この点はこれまで同様に継続していくことを確認した。

2017 年度までの旧カリキュラムに基づく教育内容を点検した上で、2018 年～2019 年度の 2 箇年をかけて、「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版」の「日本語教師【養成】における教育内容」（p.43）及び「日本語教育に関する 420 単位時間以上の養成コース」（教育課程編成の目安：表 4）（p.72 - 73）に示された必須の教育内容・単位時間数に準拠したカリキュラムに改定、移行した。特に 2019 年度の 4 月期、10 月期は、2018 年度に改定したカリキュラムに基づいて養成・研修を行いながら、各科目の担当講師との間で検討・改編を行い、よりバランスのとれたカリキュラムができた。

当機関では教育実習の実施において、併設する日本語学校の留学生に参加の協力を求めている。法務省告示校としての日本語学校を併設する当機関では、留学生を意識した授業の在り方を提示することが一つの特徴であると考えられる。今後、多様な活動分野における日本語教育現場で求められる知識や技能についても学ぶことが必要であると考えられるが、420 時間の養成・研修においては、その下地となる意識・考え方を養うことが肝要であろうという結論に達した。方針は従来通りだが、「日本語教育概論」「日本語教育事情（世界と日本/地域）」等の科目の内容の充実と同時に、「やさしい日本語」に関する講義を加え、留学生に特化し過ぎない教育内容となるよう配慮するようにした。

また、これまでカリキュラムに組み込んできた「落語に学ぶ日本語教育」「ボイストレーニング」から成る「パフォーマンス基礎講座」についても、当校の特色を出す内容として、継続して実施していくことを確認した。

当機関開設以来 42 年以上に渡り培ってきたコミュニケーション重視の教育観を教育実習に反映させるため、これまで実習プログラムの在り方について試行錯誤を重ねてきたが、基本的な方針として、初級指導のみならず中上級レベルにおける実習にも対学生実習を行うことを定番化し、またクラス授業だけでなく個人指導の形態も取り入れた教育実習を確立していく方針を確認した。

オンラインシステムの確立、サテライト教室の拡大により、通学できない環境にある人に受講の機会を提供していくために、今後一層のシステムの充実が必要であることを理解した。音質や画像の質の向上は今後も追求していく必要がある。カメラ、マイク、モニターなど、機器の更新と機器操作の熟達により、よりよい状態での配信に心を砕くことが大切であ

ると感じる。しかし、ハード面の充実のみならず、コーディネーターの役割を果たす人材の育成があって初めてオンラインコースをよりよくしていくための鍵となることも分かった。コーディネーター研修を行ったり、また東京教室と分かれて実施される教育実習の均質化を図るための教師研修も実施してゆくことが必要になるであろう。

以 上